田辺町埋蔵文化財調査報告書　第11集

京都府田辺町

堀切古墳群調査報告書

1989

田辺町教育委員会

京都府田辺町

堀切古墳群調査報告書

1989

田辺町教育委員会

7号墳出土人物埴輪

９号墳出土ガラス小玉・銀環、10号横穴墓出土銙帯金具

はじめに

埋蔵文化財は、私たちの先祖が日本列島に生活の場を求めてより、長い歳月にわたって守り伝えてきた、かけがえのない民族遺産であります。この貴重な文化遺産が失われないよう、また永く後世へ守り伝えることが現在に生きる私たちの使命であります。わが田辺町は近畿圏の中心点に位置し、また、奈良と京都を結ぶ古代道の中継点でもあり、古くから政治・経済・文化の面で常に進取の地として栄えてきました。加えて近年の住宅地の造成などによって開発が進み、地下に眠る埋蔵文化財に対する住民の関心は次第にたかまってまいりました。

さきに本町では、住民の手による『田辺町郷土史・古代篇』が昭和34年3月に刊行され、府下における文化財の調査・保護の先駆を果たし、さらにその後、『京都府遺跡地図』も刊行されました。

昭和60年の『京都府遺跡地図〔第2版〕』によりますと、田辺町内には、172ヶ所の遺跡が登載されていますが、その後の調査でもさらにその数は増えています。

ここに報告しますのは、学校建設にともなう調査で、さきの調査で横穴墓から家形石棺が発見されたところに隣接する地域で行ったものです。そして、予想どおり堀切7号墳からは、顔面に入墨文様のある人物埴輪が出土しました。とくに顔面の直弧文の入墨埴輪は出土品を代表するものであります。本書が多くの方々の目にふれ、埋蔵文化財に対する認識がたかまり、学術研究ならびに地域史研究に多少なりとも役立つことを願います。

末筆になりましたが、調査および報告書の作成にあたりまして、関係諸機関や直接発掘調査にたずさわっていただきました多くの方々に改めて厚くお礼申し上げ、刊行のことばとします。

田辺町教育委員会
教育長　吉　山　勝　平

例　言

1．本書は、京都府綴喜郡田辺町に所在する堀切古墳群の発掘調査の成果報告書である。これまで確認されている古墳との混同をさけるため、今回新たに確認された古墳の番号は、以前の番号につづけてつけた。

2．調査の概要については『日本考古学年報』31・『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集で報告しているが、遺物番号等については、今回の報告とはことなっている。

3．本書を作成するにあたっては、執筆は、第Ⅰ章1節は、林　正、2節は、吉村正親、第Ⅱ・Ⅲ章は林、Ⅳ章は吉村が、まとめは、林・吉村・西川滋が分担した。

復元作業は、西川・林・吉村が、実測・作図・写真は、林・吉村が分担した。編集その他は、林・吉村・西川で行った。

なお、遺物写真は松村茂氏の協力を、遺物実測は山口博氏・竹原一彦氏の協力をいただいた。

本文目次

はじめに

例　言

第Ⅰ章　位置と環境……1

1節　地理的環境……1

2節　歴史的環境……3

第Ⅱ章　調査の契機と経過……6

第Ⅲ章　遺跡と遺構……10

1節　丘頂部の古墳……10

2節　丘陵斜面の古墳(横穴墓)……16

3節　周辺のトレンチ……20

4節　弥生時代の遺構……21

第Ⅳ章　遺　　物……22

ま　と　め……31

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　堀切古墳群周辺遺跡分布図…… 5
第３図　建設された薪小学校…… 8
第４図　４号墳発掘風景…… 8
第５図　６号横穴墓石棺及び遺物出土状況…… 16
第６図　10号横穴墓出土鋳帯金具、９号墳出土銀環・ガラス小玉実測図…… 29

図　版　目　次

図版第１　４号墳実測図
図版第２　７号墳埴輪出土実測図
図版第３　７号墳実測図　９号墳実測図
図版第４　８号横穴墓実測図　７号横穴墓実測図
図版第５　10号横穴墓実測図　９号横穴墓実測図
図版第６　T11・E28・E９・E12・E27トレンチ断面図
図版第７　T５トレンチ４号墳墳丘南側・T６・E19・E18・E20トレンチ断面図
図版第８　T２・E14・E７トレンチ断面図
図版第９　７号墳出土人物埴輪実測図
図版第10　７号墳出土馬形埴輪実測図
図版第11　７号墳出土円筒埴輪実測図
図版第12　７号墳出土埴輪実測図
図版第13　９号墳・４号墳・４号墳下・７号横穴墓・８号横穴墓出土土器実測図
図版第14　９号横穴墓・８号横穴墓・10号横穴墓・４号墳・９号墳・４号墳下・９号墳下出土土器・弥生式土器実測図
図版第15　９号墳・10号横穴墓・その他出土・７号墳出土器台・鉄製品実測図
図版第16　（別図）　調査地全体図

写真図版目次

写真図版第1　(1)伐採前の丘陵（東から）
(2)伐採後の丘陵（右端4号墳・東から）
写真図版第2　(1)東斜面トレンチ（東から）
(2)4号墳からみた丘陵端（南から）
写真図版第3　(1)4号墳からのトレンチ（南から）
(2)丘陵端東斜面トレンチ（東から）
写真図版第4　(1)4号墳から丘陵南を望む（北から）
(2)丘陵東斜面（北東から）
写真図版第5　(1)4号墳墳丘全景（東から）
(2)4号墳玄室（南から）
写真図版第6　(1)4号墳前方部（南東から）
(2)4号墳前方部（東から）
写真図版第7　(1)7号墳南西溝土層（東から）
(2)7号墳埴輪出土状況（東から）
写真図版第8　(1)7号墳馬形埴輪出土状況
(2)7号墳人物埴輪・円筒埴輪出土状況
写真図版第9　(1)9号墳墳丘全景（東から）
(2)9号墳高杯出土状況
写真図版第10　(1)9号墳床面
(2)9号墳銀環出土状況
写真図版第11　(1)7・8・9・10号横穴墓（東から）
(2)4号横穴墓（東から）
写真図版第12　(1)7号横穴墓棺台
(2)8号横穴墓遺物出土状況
写真図版第13　(1)10号横穴墓人骨・遺物出土状況
(2)10号横穴墓床面遺物出土状況

写真図版第14　(1)10号横穴墓鈎帯金具出土状況
(2)10号横穴墓人骨出土状況
写真図版第15　(1)E18トレンチ高杯蓋出土状況
(2)E26トレンチ鉄斧出土状況
写真図版第16　(1)7号墳出土人物埴輪1（正面）
(2)7号墳出土人物埴輪1（顔面直弧文部分）
写真図版第17　(1)7号墳出土人物埴輪1（右側面）
(2)7号墳出土人物埴輪1（左側面上部）
写真図版第18　(1)7号墳出土人物埴輪1（背面）
(2)7号墳出土人物埴輪1（背面上部）
写真図版第19　7号墳出土人物埴輪3
写真図版第20　(1)7号墳出土人物埴輪2（正面）
(2)7号墳出土人物埴輪2（左側面）
写真図版第21　7号墳出土馬形埴輪
写真図版第22　(1)7号墳出土馬形埴輪左側頭首部
(2)7号墳出土馬形埴輪鞍部
写真図版第23　(1)7号墳出土須恵器大型器台
(2)7号墳出土歪円筒埴輪
写真図版第24　土器(1)
写真図版第25　土器(2)
写真図版第26　土器(3)
写真図版第27　(1)10号横穴墓出土鈎帯金具
(2)9号墳出土ガラス小玉
(3)9号墳出土銀環
(4)9号墳出土銀環
(5)10号横穴墓出土鉄釘
写真図版第28　弥生式土器・土師器

第Ⅰ章　位置と環境

1節　地理的環境

田辺町は、京都府の南部に位置し、奈良時代は山背国に属し、その南にあることから一般的に南山城とよばれている。現在、西は大阪府枚方市・西南は奈良県生駒市・南は相楽郡精華町・東は木津川を隔てて綴喜郡井手町・東北は同じく木津川を隔てて城陽市・北は八幡市に接し、京都・奈良・大阪への交通の接点に位置している。

今回調査した堀切古墳群は、田辺町大字薪小字堀切谷・大欠に所在する。近鉄京都線新田辺駅の西方約1.5km、ＪＲ片町線田辺駅の西方約1.3kmに西薪とよぶ集落があり、その南西に堀切谷や大欠を含む丘陵がある。この丘陵は生駒山脈に連なる甘南備山(標高217.5m)山麓の東北に広がっている。

甘南備山の山頂に神南備神社と元甘南備寺地があり、平安時代末期に成立した『今昔物語』の中に「神奈比寺の聖人……」として記されている。

堀切古墳群を有するこの丘陵からは、東北を流れる木津川を始め、京都市内も遠望でき古くは巨椋池の水面も望みえたであろう。

田辺町の地形は、西部に甘南備山を含む生駒山地と、大阪層群の田辺丘陵で高く、東部は木津川の沖積でできた平地で低い。すなわち西高東低となっている。そして、この丘陵地から低地に至る地域に、古代から多くの人々が生活を営んできた。

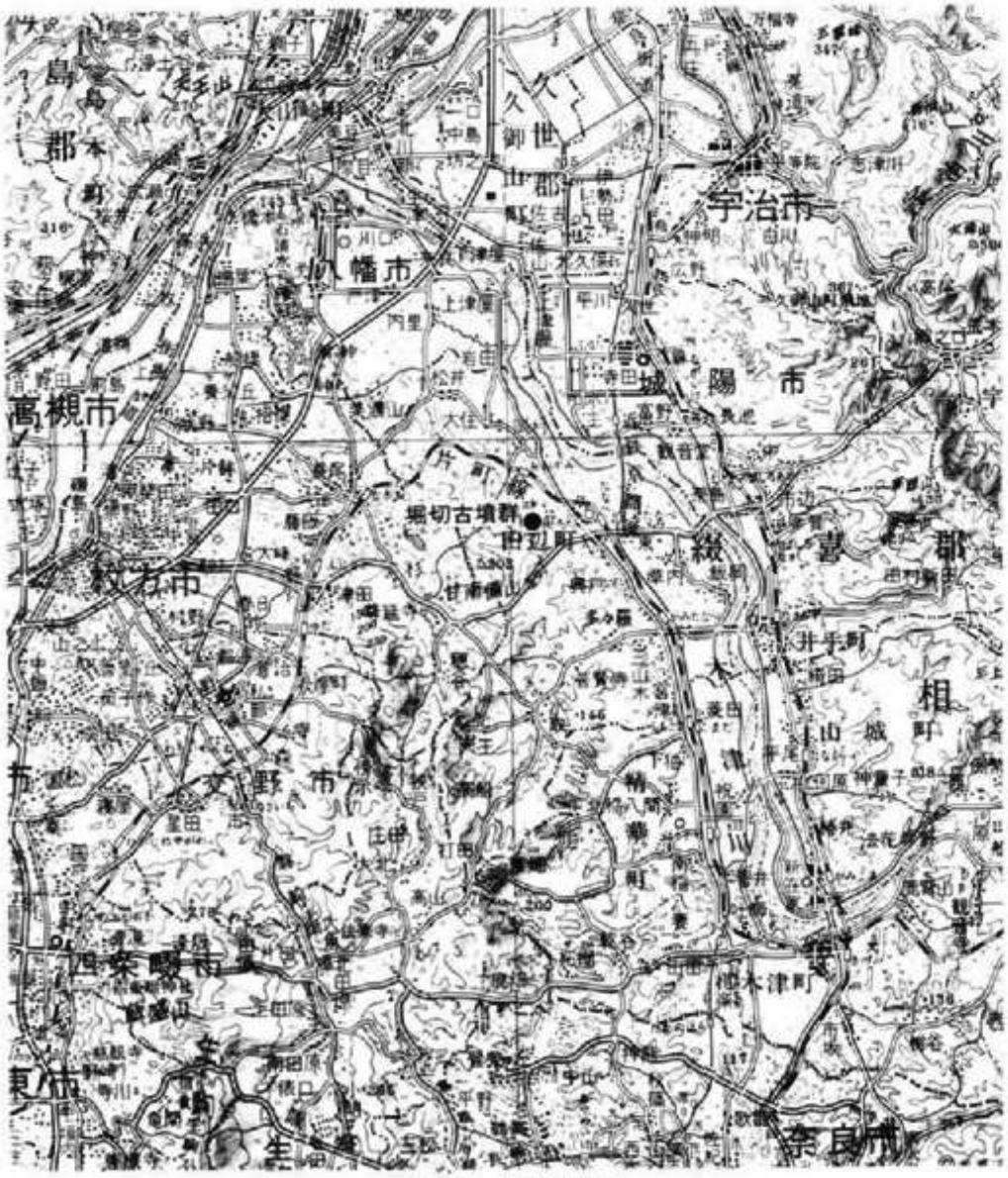
田辺丘陵は、大阪層群大住礫層といわれ、洪積期の粘土や砂・礫などが堆積した地層で地盤の弱い丘陵である。そのため、風雨による土地の浸食が激しく、流れたり削られたりしてかなり地形が変化している。この対策としての砂防工事が行われ、保安林が築かれ地形が複雑に変化した。堀切古墳群のある地域も風雨の浸食や砂防工事で、起伏の激しい丘陵となった。薪の小字名である大欠・小欠・大崩などの地名からも、土地の状態や変化がわかる。

一方、東部の低地は、木津川によってつくられた沖積層からなっている。この木津川に堤防が築かれなかった昔は、水流が右へ左へとかなり蛇行し、自由な流路をとりながら北流していたようである。そして、上流からの土砂の堆積により木津川の川底が高くなり、木津川に流れ込む小河川の川底も上昇し、必然的に天井川を形成することになった。

この低地帯に残る坪や里に関する地名などから、谷岡武雄氏により条里制の復元[1]がなさ

れている。この谷岡氏の復元と対比しながら、飯岡丘陵西南部で発掘調査[2]が行われ、現在東西および南北に横切る畦畔が古代条里制地割とほぼ一致することが実証された。

交通路をみると、木津川の水運は、淀川・巨椋池・宇治川などを利用することにより、難波や近江に通じ、早くから開かれていた。また、陸路においても、和銅4年（711）綴喜郡山本駅が設置されており、これより以前の7世紀に山陰・北陸・東山の三道が山城盆地内を通過している。このうち、山陰道は田辺町内を通過し、大住村付近から老ノ坂峠を越えて丹波に向かっていたようである。このように、田辺町は古代における水陸両交通の幹線であったといえる。



第1図　遺跡位置図

2節　歴史的環境

山城盆地における群集墳の分布は、その群構成と内容において大きく4つの地域にわけることができる。第1群は、大枝・広沢池地区にあって円墳と横穴式石室を有する大きな群で、全体で100基以上になり、大型前方後円墳の後をうけて6世紀に成立した。第2群は、7世紀に東山を中心として成立した六条山・旭山古墳群で、小型横穴式石室で築造され、6世紀の伝統を持ちつつ小型化し、埋葬は天井部よりなされた形式である。次いで第3群は、井手・城陽地区にあって大型前方後円墳の後に6世紀を中心とした横穴式石室墳や方墳が見られ、木棺直葬も存在する群である。特に、井手町小玉岩古墳群では、石室をやや小さくした横穴式石室墳のまま終末をむかえている。第4群の八幡市・田辺町にまたがる一帯には、あまり大きな中期の前方後円墳はなく、6世紀中葉の横穴式石室が終了した後に長い羨道を持った横穴墓が成立する。その主なものは、美濃山横穴墓・松井横穴墓・堀切横穴墓・飯岡横穴墓などをあげることができる。この地区に共通するのは、礫を主体とする軟らかい洪積層に穴を掘るだけの素掘りで構成されるものである。この他にも、木津地区には5世紀を中心として埴輪を使用する群が調査されつつある。

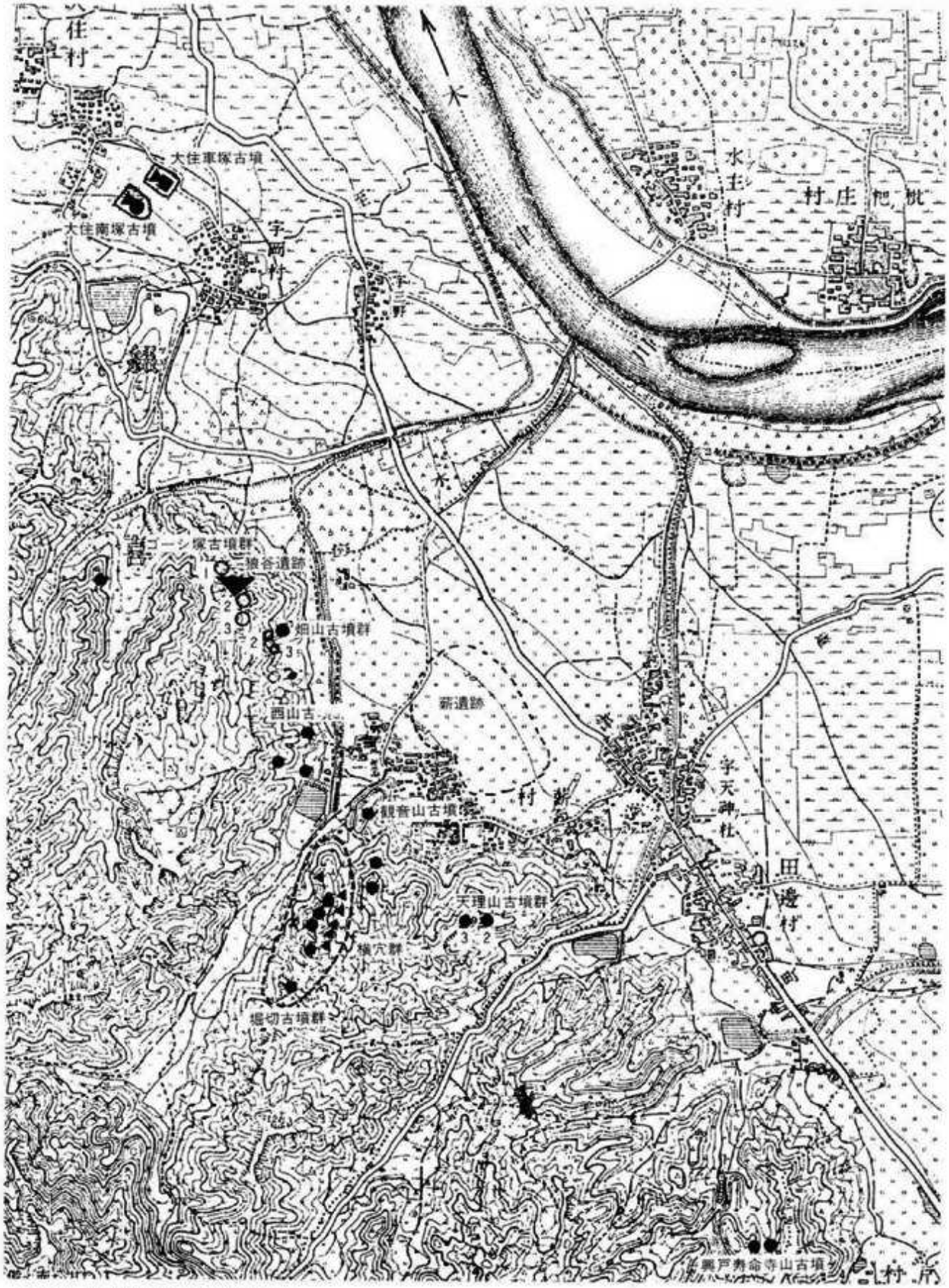
田辺地区に限定すると前期大王クラスの古墳は、飯岡車塚古墳のみで、この後は城陽地区に移ってしまう。首長系列の前期古墳は興戸寿命寺山古墳群にあって、他には認められない。5世紀の首長系前方後円墳は、大住車塚古墳・南塚古墳のみが現存している。6世紀横穴式石室は、下司古墳群を代表とする普賢寺谷の古墳と新地区の古墳群・宮ノ口白山神社裏の古墳がある。6世紀末から7世紀中葉にかかるものは、飯岡横穴墓と堀切横穴墓・松井横穴墓がある。その内、松井地区と美濃山地区は一つの群と考えてよく、大住・八幡一帯の住民の共同墓域であったと考えられる。ここより南には、中型ないし小型の群集横穴墓しか見られなくなる。横穴墓のみについて考えるなら、大和北部の佐紀盾列古墳群には、広い玄室を持ち陶棺を有するものが存在するが、山城の横穴墓への影響は考えられない。

新地区に限定するなら、天理山古墳群には埴輪を有する円墳（2号墳）がある。北には西山古墳群・畑山古墳群・ゴーシ塚古墳群がある。その中央部に位置するのが堀切頂上墳である。西山・畑山には埴輪は確認できない。6世紀中葉の群集する横穴式石室墳には、村落の有力首長ないし首長に列なる有力構成員が埋葬され、詳しくみると堀切・観音山・天理山・西山・畑山の群に分けることができる。畑山古墳群には、20mクラスの円墳の周辺に小さな石室墳と単葬墓が、西山はやや大きな石を使用した一群が、天理山には3基の

円墳があり埴輪を伴う。堀切頂上墳は横穴式石室を中心として、埴輪を有するものは2基確認でき、丘陵突端から奥に向かって造られて、今回の調査地はその半分に当たっている。

さて、これら墳墓に葬られた住民の生活空間はどこかというと、井手川が形成した扇状地の中央部に薪遺跡がある。かつて、一度調査[3]した結果によると、人工水路の中に壺・甕・椀・甑・須恵器杯等がかなりの量存在し、6世紀中葉～後半にかけてのものであった。さらに、周辺には、8世紀から9世紀にかけての遺物もあり、13世紀の瓦器椀も採集している。この扇状地は南ないし西の山によって区画されており、薪遺跡の住民が周辺の山に葬られたものと考えてよい。それ故に単一の歴史的単位と考えてよく、その環境と遺跡を単位として保存することは重要な課題であると考えている。

このような歴史的単位は、田辺町だけでも薪地区（井手川）・田辺地区（防賀川）・興戸地区・普賢寺谷・宮ノ口地区、精華町内では、狛田谷・祝園谷・山田川の谷とある。この中には弥生式遺跡を伴う例があるが、前期古墳へ続いているとはいえない。むしろ、6世紀中葉になってから再開発されたものと考えてよく、集落遺跡の存在も早晩明らかとなろう。しかるに、これらの谷間・山々を一気にくずした学研都市改造が進行して十分な保存の手が加えられていないのは、まことにいたましい限りである。それには、比較的良好な状態の内に遺跡確認調査を実施すべきであり、古代のみならず中世・近世をもふくんだ時代についても書かれなかった歴史を掘り起こす必要があろう。



第2図　堀切古墳群周辺遺跡分布図

2万分の1

第II章　調査の契機と経過

田辺町薪集落の西方に位置する堀切古墳群は、すでに『田辺町郷土史・古代篇』[4]や『田辺町史』[5]に記載されている。

甘南備山の山麓に広がる南から北に延びる標高76メートル前後の洪積層の東と西の二つの丘陵端にあるこの古墳群は、丘陵上に造られた高塚古墳と丘陵斜面に掘穿された横穴墓の二つのグループから構成されており、丘陵上の古墳6基と横穴墓9基がこれまで京都府遺跡地図に登録されている。しかし、これらのほとんどが半壊や全壊してしまっている。また、西側丘陵の西斜面裾の桃畑の崖から須恵器の大型甕が単独出土している。

昭和53年田辺町立田辺小学校の児童増加に伴い、学校分離の必要性がおこり、いくつかの候補地の検討の結果、このうちの西側の丘陵がその建設の用地にあてられた。このため、昭和53年8月堀切古墳群発掘調査委員会が結成され、10月に調査団が編成された。そして府文化財保護課の指導のもとに田辺町教育委員会により、昭和53年11月6日から54年4月7日まで発掘調査を実施した。

今回調査の対象となった丘陵は、稜線を境にして東を堀切谷、西を大欠谷と呼ばれている所で、建設用地内には、これまで横穴式石室を内部主体とする円墳1基（4号墳）横穴墓7基（3号～9号）が府遺跡地図に登録されていた。

発掘前の丘陵の状態は、稜線から中腹にかけては松の大木や雑木類で一面におおわれ、うっそうとした林であった。また、地表面にはシダ類が生え、腐葉土が10～20cm堆積していた。このため、伐採やその処理に時間がかかり、2ヶ月近くを費やした。

横穴墓のある丘陵東斜面は地肌がみえ、絶壁になったりしている部分が多くみられた。丘陵端も削られ、今は絶壁になっている。これは、竹林の土入れの土取り等によるものであって、この作業中に須恵器等の遺物が出土していると聞く。昭和44年に調査[6]された、横穴墓5・6号も土取り作業中発見されたものである。

丘陵東裾部分は削平されて、現在竹林になっているが、元の地形より1～2m低くなっているという。一方、西斜面は大正初期の砂防工事などにより削られ、裾部分も削平され畑になっている。以前は、この丘陵の幅はもっと広く、西裾は井手川あたりまであり、稜線も現在よりかなり西にあったそうである。しかし、水害や砂防工事などにより、現在のような痩尾根になったという。

このように、丘陵も流れたり、削られたりしているため、墳丘の盛り土もほとんどなく

原形を留めていない状態である。このため、発掘にあたっては4号墳から始め、稜線にそってトレンチを設定していった。

南山城の久津川古墳群・椿井大塚山・男山古墳群などにみられるように、これまでの支配階層を中心に築造されていた大古墳が古墳時代後期にいたり、支配階層以外の人々も次々と古墳を築造するようになっていった。木津川左岸においても同様である。

ところが、南山城においては、中期までの古墳の調査は比較的よく行われているのに比べ、後期古墳の調査が非常に少ない。このため、この地方の後期古墳の研究は今後の調査の増加とともに明らかになると思われる。また、八幡市美濃山から田辺町松井・薪にかけての丘陵に分布する横穴墓は、この地方での特殊な墳墓形態であり、横穴墓を含めた後期古墳の今後の研究における課題の一つである。堀切古墳群ではこの両者が同一丘陵に分布しており、そういった意味からも調査の意義は大きいといえよう。

調査は次に掲げる組織により実施した。

なお、この調査は、献身的なご協力・ご指導くださった多くの方々のご厚意により終了することができた。以下にその名前を記して厚くお礼申し上げる次第である。（所属は調査当時）

堀切古墳群調査委員会

委員長	籔下　撤一（田辺町教育委員会教育長）
副委員長	村井　博（田辺町文化財保護委員長）
事務局長	古川　章（田辺町教育委員会社会教育課長）
調査団長	西川　滋（田辺町立田辺東小学校教頭）
調査主任	林　正（田辺町立大住小学校教諭）
顧問	鈴木　重治（同志社大学）
	吉村　正親（京都市埋蔵文化財研究所）
補助員	中村　重夫(同志社大学)・津村　陽子(大谷大学)・中井　康智(城陽高校OB)
協力者	福島雅儀(同志社大学)・山口　博(京都教育大学)・竹原一彦(花園大学)・横村広美(華頂短期大学)・林千代美(家政短期大学)・南谷一寿(加古川養護学校教諭)・大槻幸子(南宇治小学校教諭)・吉村儀一(薪区長)・野村正平

作業員　星　正男・二宮　亨・野村　勇・奥村一夫・中村武一・中尾文次郎・末崎文橋・加藤芳雄・吉川　茂・村山敏夫・吉村文子・中村熱子・奥村良子・木村由美子・喜多文子・野村トシエ・加藤美代子・村山秋枝・河村和子・山本登起子・池永和子

機材借用にあたっては、田辺町役場建設課・産業課・中野工務店の協力をえた。

第3図　建設された薪小学校

第4図　4号墳発掘風景

月　日	発　掘　調　査　経　過				
53年					
10・ 2	堀切古墳群発掘調査団を編成　打ち合わせ会				
11・ 6	現地事務所づくり・機材搬入				
11・ 7	4号墳の下刈り・及び伐採		伐採・下草刈・腐葉土はぎ		測量
11・20	測量開始				
11・24	慰霊祭				
	4号墳にトレンチ設定	4号墳			
12・ 5					
12・10	4号墳から稜線に沿って南北にトレンチ拡張　7号墳・8号墳を確認	7・8号墳			
12・16	7号墳埴輪実測				
12・27	8号墳発掘				
12・29	4号横穴墓発掘				
54年					
1・ 9	7号横穴墓発掘		7号横穴墓		
1・20	8号横穴墓発掘			8号横穴墓	
2・12	トレンチ断面図作成				
2・18	現地説明会				
2・20	9号・10号横穴墓発掘				9・10号横穴墓
3・ 2	9号墳発掘	9号墳			
3・27					
4・ 1	横穴墓実測及び写真撮影				
4・ 7	調査終了・機材撤去				

第Ⅲ章　遺跡と遺構

1節　丘頂部の古墳

堀切古墳群内には、6基の横穴式石室を内部主体とする高塚墳墓が知られている。東丘陵の1号～3号墳はいずれも全壊している。西丘陵には3基（4号～6号墳）が知られており、このうち今回の調査区域内には4号墳が存する。

5・6号墳は、調査の区域外でこの丘陵の奥、小字大欠との境界付近の丘陵頂部にあり5号墳からは円筒埴輪の出土が報告されているが、今は全壊してしまっている。

丘陵の様子は、すでに知られている4号墳が標高76mの高位置にあり、4号墳より丘陵端方向に低くなる。そして、丘陵端にかけては起伏も少なく、この丘陵では幅の広い丘頂部になっているが、地山が露出している状態で、遺構の確認は難しい。丘陵端は現在、土取りで削られ、絶壁状になっている。4号墳より丘陵奥にかけては、西斜面は頂上部から砂防工事で削られ、東斜面は土取りや風雨による浸食もはげしい状態で、丘頂部も非常に狭小となっている。そこで、4号墳を中心に稜線に沿ってトレンチを設定していった。その結果、4号墳より丘陵奥に3基の古墳を確認することができ、7・8・9号墳とした。

なお、8号墳は古墳としての確たる遺構は検出されていないが、遺物の出土・マウンドの状態・周囲との関連などから考えて古墳としたものである。

(1)　4号墳

位置と墳丘

府遺跡地図に示されている4号墳は、標高76.5mに位置する。また、この丘陵は4号墳より丘陵先端部にかけて傾斜しており、この古墳からの景観は一番すぐれ、新集落を始め、木津川から京都にいたる盆地が一望できる。

古墳の西側は地主との境界線であったため、尾根は削られることも少なく、はり出した状態で、裾は井手川近くまで続いている。北側は砂防工事などで削られている。その墳丘裾部に石材2個が露出していた。1個は倒れた状態で、他は石室の基底石として築造時の状態を保っている。南側は7号墳と接し、裾部の残りもよく周溝部分の一部も確認できた。また、東側は、風雨で土砂が流されている。このような状態であるが、墳丘はやや盛り上がりをみせ、他の古墳に比べ一番マウンドの残存状態もよい。

遺物と遺構

埋葬施設は横穴式石室で、石室は自然地形をうまく利用し、地山を掘りこんで造られている。地表下２ｍで石室床面にいたるが、石室の材料はすでに抜き取られ、露出していた２個の石材のみである。表土下より黄褐色の砂礫層でうめられ、すでに攪乱された状態である。この攪乱層中の表土下50cmから須恵器片・鉄片が、1.5m下から長径30～40cmの石材が３個と土師器が出土している。また、玄室床面近くから、裏込めや間隙をうめるのに使った長径20～40cmの石材が約20個残っていた。これらの石材は近くの甘南備山から産出するものと同じである。床面を精査したが、この石材の他遺物の検出はできなかった。露出していた基底石に沿って石室側石の掘り込み穴が確認でき、これからすると、玄室の横幅1.2mで、主軸は磁北より18度西に向いている。羨道部分はすでに削り取られてしまっているため、石室の構造は不明である。

古墳の大きさを確認するため、稜線に沿ってＴ４・Ｔ５トレンチを、さらにＥ18・Ｅ19・Ｅ20・Ｗ８・Ｗ９・W10トレンチを設定した。Ｔ５トレンチで７号墳と接する周溝がみられた。この溝内から埴輪片の出土がみられたが、これは７号墳にともなうもので、４号墳の外部施設は他のトレンチからも確認できなかったことから、埴輪等の施設はなかったと考えられ、７号墳との築造時期の差がうかがえる。

Ｅ20トレンチから弥生式土器片が出土したことからトレンチを拡張した。その結果、地山が斜めに落ちていることが確認できた。この地山が斜めに落ちた部分は、Ｅ18・Ｅ19・Ｔ４トレンチに続いている。砂防工事等で削られているが、Ｗ８・Ｗ９トレンチでもわずかに確認できた。

稜線上のＴ４トレンチでは、表土下の地山が墳頂部分からなだらかな傾斜で下がり、３ｍほどの水平面を保ち、その後、斜めに約１ｍ落ちている。斜めに落ちた部分では黄褐色砂礫層が厚く堆積している。

Ｅ18トレンチの表土下70cmの暗黄褐色砂礫層から須恵器高杯蓋（図版13-6）が、Ｔ４トレンチの黄褐色砂層から須恵器高杯蓋（図版13-3・13-4）が、Ｅ20トレンチの黄褐色砂層からも須恵器高杯蓋（図版13-5）が出土している。いずれも４号墳の流失遺物と考えられる。

W10トレンチでは、表土下すぐ地山となり、遺構はなかった。

以上のことからすると、この古墳は墳丘の高さは２ｍ、直径約20ｍの円墳となり、そこに約８ｍの前方部がとりつき、全長約28ｍの横穴式石室をもつ前方後円墳と考えられる。

(2) 7号墳

位置と墳丘

7号墳は4号墳の南に接し、標高75mで4号墳よりやや低い位置にある。マウンドもなくなり、平坦で弓状にへこんだ狭小な尾根になっているため、古墳が存在することは予想されていなかった(図版3)。4号墳からの稜線トレンチを延長することにより、北と南に周溝の一部が確認された。北の周溝部分は攪乱されている。

墳丘の3分の2は砂防工事などで削られてしまい、主体部は不明である。封土はほとんどなく、稜線上では約5cmで地山に達する部分もある。地山の自然地形を平坦化してその上に盛り土されている。

地山の上層は黄褐色礫層・黄褐色砂層・灰褐色砂層・表土となっており、灰褐色砂層はほとんど流れてしまっている。かつては、この灰褐色砂層や黄褐色砂層が墳丘を覆い、マウンドを形成していたが、削られたり風雨による流出でマウンドもなくなり、平坦化してしまったようである。

北部の周溝は長さ1.2m残存しており、4号墳の周溝と併用している状態で、幅1.4m、最深部で地山を50cm掘り込んで造られている。最大幅80cm・最小幅40cmである。この周溝内の埋土は、黄色砂層が最下層に堆積し、その上層に黄褐色砂礫層・黄褐色砂層となる。

南部の周溝は4.5m残存しており、8号墳の周溝と併用している。平坦化した地山は周溝部分に至って、残存する深い部分では1.2m落ち込んでいる。この周溝内では、褐色砂層が最下層に堆積し、その上層に赤褐色砂礫層・黄褐色砂礫層・灰褐色砂礫層をはさみ黄褐色砂層が堆積している。灰褐色砂礫層には、灰・木炭片を含み、磨滅の少ない円筒埴輪片も多く混入している。

この北と南の周溝から内周を復元すると、ほぼ直径15mの円墳が推定できる。高さについては不明である。

遺物と遺構

先にも触れたように、墳丘のほぼ3分の2がすでに削られてしまっているため、埋葬施設及び内部に副葬された遺物の検出はできなかったが、残存する東部の墳丘部分および北部と南部の周溝部分より、形象埴輪・円筒埴輪・須恵器大型器台などが出土している。

4号墳と接する北部の周溝部分は攪乱されており、磨滅した円筒埴輪の小片がわずかに検出された。墳丘部が残る東部分の墳丘裾部分で、表土下黄褐色砂層中よりやや大きな円筒埴輪片が出土している。この部分の埴輪を復元してみると、底部だけが残っているものが多く、地上に出ている部分が崩壊した後、土に埋まった部分が残されたものである。

南の周溝部分および墳丘裾部分から形象埴輪・円筒埴輪・須恵器大型器台が出土している。この南の周溝部分ガラガラの灰褐色砂礫層の下層で、地山上層の赤褐色砂礫層中に焼け歪みのある須恵質の円筒埴輪が北から南に倒れた状態で出土した。そのため8号墳との境界壁を取り除くことにより、さらにこれに接し、東に倒れた状態の半壊した円筒埴輪の出土がみられた。また、このそばから須恵質の人物埴輪の頭部も出土している(図版2)。

周溝部分の黄褐色砂層から出土する埴輪片は小片で磨滅もしているが、その下層の灰・木炭を含む灰褐色砂礫層や赤褐色砂礫層から出土するものは大きな破片で磨滅もない。この灰褐色砂礫層中より多くの人物埴輪片・馬形埴輪片・靫形埴輪片・須恵器大型器台片・円筒埴輪片が出土している(図版9・10・11・12・15−48)。

墳丘裾から周溝部分で馬形埴輪のほぼ1個体分がつぶれた状態で出土し、その北よりに人物埴輪片がかたまって出土している。これらの様子からすると、墳丘の南側に須恵質の直弧文を顔面につけた人物埴輪・首飾りをつけた女性の人物埴輪・子どもとみられる人物埴輪・馬形埴輪が置かれ、墳丘の周りには円筒埴輪がめぐらされて、焼け歪みの須恵器大型器台もおかれていたようである。また、靫形埴輪かと思われる形象埴輪片は、先の調査で、横穴墓発掘中に出土した須恵質の陶棺片と報告されているもの[7]と同質のものである。この埴輪は表土からも出土している。

1個体の遺物の出土をみても、層的にも異なり、場所的にも広がりがみられる。この7号墳周辺の丘陵西斜面に広く埴輪片が出土し、西斜面裾部分では現表土下2〜3mからも出土している。また、須恵質の人物埴輪と同様に焼かれた須恵質の円筒埴輪片が西斜面裾のW11トレンチからも出土しており、須恵質の人物埴輪と同様に焼かれた円筒埴輪が数個墳丘に樹立していたと思われる。

(3) 8号墳

位置と墳丘

7号墳の南に接し、標高76mに位置する。T6トレンチの断面図(図版7)にみられるように、赤褐色砂礫層下の地山の落ち込みが7号墳の周溝に至っている。また、8号墳の周溝と思われる遺構の一部が確認された。この周溝より上がった部分はやや平坦な地形になっているが、これより9号墳にかけては、幅1mのT7トレンチを設定するのがやっとといった痩せ尾根になっている。このT7トレンチで地山の落ち込みがみられ、これをこの古墳の南端と推定すると、直径約16mの円墳が想定できる。地形からすると、主体部はすでに削られてしまっている状態である。遺物はT6トレンチ南端部分で須恵器片が2個

出土しているのみである。古墳としての明確な遺物・遺構は確認できないが、位置的な面から8号墳とした。

(4) 9号墳

位置と墳丘

標高77mに位置する9号墳は、学校用地買上地の南の境界線上にあり、今回の調査のうち、丘陵の一番奥にある古墳である。さらに、この丘陵の奥、小字大欠との境界には全壊の5号墳・完存の6号墳が存在する。

この古墳は、南から北にのびてきた丘陵がやや東に屈曲する部分で、地主との境界線であったため、一部砂防工事も受けず、西裾まで尾根が張り出し、三角状の部分に半壊の状態で残存している。尾根斜面に抜き取られた石材の一部が置かれていたことや、稜線トレンチT8内から鉄片の出土をみたことなどから調査を進めた所、石室の右側壁の一部が検出できた。

東斜面は土取りで崖面になっており、裾には前回調査の5・6号横穴墓があったところである。西斜面は、張り出した部分を除いて砂防工事で削りとられてしまっている。このため、尾根は痩尾根になっており、稜線上には幅90cmのトレンチを設定するのがやっとの状態である。

このようなことから、墳丘の形態を全く留めていない。ただ、T7トレンチ内に落ち込みがみられ、これが9号墳の端とすれば、ほぼ径20mの円墳が推定できる。

埋葬施設

9号墳の内部構造は西に開口する横穴式石室であるが、調査時には4号墳と同様、石室に用いられた花崗岩の石材は大部分抜き取られてしまい羨道部の3個と玄室内の1個を残すのみであった。このため、羨道部から調査を進めていった。玄室の奥壁から右側壁部分にかけて石室の間隙をうめたり、裏込めに使われた小石材がみられた。

掘り方は地山を掘り窪め、径30～50cm大の小型の石材を使って石室が造られていたようで、羨道部の石積みからすると、掘り方と石室の間には幅があり、基底石をしっかり据え、その上に2段目をのせている。封土は地山の掘削土を使用しており、褐色砂層・褐色礫層などが一部に残っている。また、石室に袖を有したかどうかは現状では明らかでない。石室入口付近は砂防工事をうけず、尾根は裾まで広がっている部分なので、浸食は考えられるが、たいした地形の変化はないと思われる。そこで、残存する羨道部の側壁の基底石より西側前方では地形の傾斜がみられることから、この基底石が石室の入口部分にあたると

考えられる。

石室床面も半分は砂防工事で削られてしまっているが、玄室床面は地山をU字形に掘り窪め、深い部分では25cmの礫を含む灰黄褐色砂質土で固め、その上に5～10cm程度の河原石が全面に敷かれている。羨道部分の床面は地山で敷石も施されていない。羨道部と玄室が敷石で区別できるとすれば、羨道部の長さは1.7m、玄室の長さは3.5mが推定される。

玄室中央部から前方の敷石には赤色顔料が付着していた。また石室の石材に混じって板状石片が数点検出されており、板状石による組み合わせ式石棺が安置されていたのではないかと考えられる。

遺物の出土状況

石材の抜き取り時の攪乱と砂防工事により、遺物も原位置から移動したり、流失したりしている。玄室奥壁右部分から須恵器蓋片(図版15－45)・左部分から鉄片(図版15)・ 中央部と奥壁部より銀環(第6図・写真図版27)・羨道部側より鉄刀(図版15)と1個体分の須恵器高杯(図版13－2) が出土している。また、奥壁の須恵器蓋片出土地点よりガラス玉2個が出土した。このため、床面石敷をはずし、土砂をふるいにかけた結果、他に3個のガラス玉がみつかった。

これらの遺物は、床面石敷に接して出土しているが、この他に、稜線トレンチ内より鉄片が、また、この9号墳より流出したと思われる須恵器高杯（図版13－17）が東斜面の浸食され溝状になった中より出土している。

2節　丘陵斜面の古墳（横穴墓）

横穴墓群は、西側丘陵の東斜面に7基と東側丘陵の北斜面に2基が知られている。東側丘陵の1・2号横穴墓は土取りのためにすでに消滅してしまっている。ここから須恵器の出土が伝えられている。調査の西側丘陵の3～9号の7基の横穴墓のうち、3号横穴墓は丘陵端の北西向きの斜面にあり、土取り作業中に発見され、その中より須恵器杯14個が出土したと伝えられているが、現在は削りとられて消滅している。4号横穴墓は東斜面中腹の崖上に穴があいて残っている。

5・6号横穴墓の2基は、昭和44年に竹林の土入れ用の土取り作業中発見され、府文化財保護課、堤圭三郎・高橋美久二両氏により調査された。構造は2基とも「とっくり形」の平面で、天井は残部から「かまぼこ形」にまるくなっていたと推定される。特に、6号横穴墓は、床面に木炭を敷き、その上に礫を敷いている。また、凝灰岩製の組合式家形石棺が出土し、その中に頭を東に置いた人骨一体分が保存されていた。この2基の横穴墓の構造・遺物・家形石棺などから古墳時代後期後半、7世紀前半までに構築された古墳として記録されている。

7～9号横穴墓は、先の分布調査により丘陵腹部の凹んだ部分を横穴墓の天井が落ち込んでいるものとして遺跡地図に追加されたものであるが、今回の調査により、丘陵中腹に雨水が流れ落ち、浸食された部分であることがわかった。そして、新たに4基の横穴墓が発見され、丘陵端方向から順に7号～10号横穴墓とした。この4基の横穴墓はすでに開口している4号横穴墓からほぼ等間隔にならんでいる。

堀切古墳群の横穴墓は、田辺町飯岡横穴墓・山城町北谷横穴墓にみられるように花崗岩の岩盤を穿って構築されたものでなく、砂・粘土・礫などで構成された洪積層の浸食しやすい弱い地盤に構築されている。このためにどの横穴墓内にも土砂が流入し、玄室の天井部まで堆積している状態である。

第5図　6号横穴墓石棺及び遺物出土状況

(1) 4号横穴墓

概況

土砂採集時に発見されたこの横穴墓は、東斜面の中腹、標高64.2mの崖上に開口したままで残っている。この中より須恵器・刀などが出土したと伝えられている。現在は崖上にあるが、以前は自由に出入りできたようで、子ども達の遊び場になっていたそうである。また、動物の住処にもなっていたらしく、奥壁の南側隅に幅60cm・高さ46cmの抜け穴があいている。このため、床面や壁面が削られたり、長い間風雨にさらされているためかなり原形がそこなわれている。

内部構造

現状からすると、残存部の床面での奥行2.96m・高さ1.54m・玄室の幅1.40mである。平面形は玄室と羨道の明確な区別をもたない形式のいわゆる「とっくり形」のプランであろう。また、天井の構造は明確でないが、残存部分からするとアーチ形と考えられる。床面の精査を行ったが、遺物等の検出はできなかった。

(2) 7号横穴墓

概況

4号横穴墓のとなりに位置し、レベル的には4号横穴墓よりやや低く標高63.0mである。比較的大きな横穴墓であるが、天井部は全くなく、玄室の一部もすでに削り取られている状態である。玄室の天井近くまで黄褐色砂礫の地山の土がつまっており、層的変化はみられなかった。

内部構造

残存部の奥行2.15m・幅1.65mである。平面形は奥壁の隅はまるく、玄室から奥壁に向かってやや広がりをみせている。また胴がややふくらんだ形になっている。天井の形態は知ることはできないが、周囲の状況からすると、アーチ形であろうと推察される。

床面には、3個の長径40～50cmの棺台の石が残存している。対角線上にもう1個あったと思われるが、土取りで消滅してしまっている。石材は近くの甘南備山周辺に産出する変成岩である。棺台の奥壁側の石は15cm、手前の石は10cm床面よりでている。羨道方向にやや傾斜をもっている。

遺物は少なく、玄室左壁床面P点（図版4）より土師器の甕形土器（図版13－15）1点が出土したのみであった。

(3) 8号横穴墓

概況

床面で標高62.7mに位置し、今回の調査の横穴墓の中で一番小型である。この横穴墓も以前には開口していた時期があるのか右奥壁に動物の抜け穴があいている。天井まで流土がつまっていたが、その土砂内にわずかではあるが5mm前後の小さな木炭片が含まれていた。レベル的にも広がりがあり、平面的にもかたまった出土状態ではなく、量的にも非常に少ないものであって、火葬による追葬とは考えられない。床面からの木炭の出土はみられなかった。

内部構造

残存部の奥行2.8m、奥壁の幅1.0mである。すでに天井部は削られてしまっている。平面形は羨道部と玄室の境はなく、奥にいくにしたがって広くなり、奥壁で最大となるとっくり形である。床面はほぼ水平である。立面形はアーチ形であろうと推察されるが、床面から天井方向へやや広がりをみせている。

出土遺物

全て須恵器で、玄室の前方部にほぼ原形のままでかたまって出土しており、平瓶1点・高杯1点・杯7点(図版13－10～13・18・19・図版14-25)・蓋1点(図版13－14)である。平瓶(図版13－21)は、ほぼ中軸線上で他の遺物より少し離れて、口縁部を下にして床面よりやや上に位置している。中には土砂がつまっていた。高杯(図版13－20)は右側壁よりに立った状態で出土している。また小形の杯(図版13－19)は上向きに、他の3点はかたまって出土している。また、羨道よりに少し離れて杯2点が出土している。平瓶以外の須恵器は床面に接した状態である。

(4) 9号横穴墓

概況

床面で標高62.1mに位置する。天井部はすでに削られてしまっているので不明である。横穴墓内に堆積した土層は、上から暗黄色砂礫層・暗赤褐色砂層・黄白色砂層・明黄褐色砂層（若干の礫を含む）の4層に分けられる。

内部構造

残存部の奥行は4.2m・奥壁の幅1.5mである。構造は8号横穴墓と同形式で、羨道と玄室の境はなく、平面形では奥壁幅が一番広く、前方にいくにしたがって狭くなるとっくり形である。立面形はアーチ形と推察されるが、床面から天井方向にやや広がりをみせてい

る。床面はほぼ水平である。

遺物は少なく、右奥壁近くと左壁面からの須恵器杯１点(図版14－22)・高杯杯部片２点(図版14－23・24)・脚部片１点(図版13－16)である。

(5) 10号横穴墓

概況

今回調査した横穴墓の中では丘陵の一番奥にあり、床面での標高は62.9mに位置する。この横穴墓も天井部はすでに削りとられてしまっており、玄室内は流土でつまっていた。玄室内の土層は３層に分けられ、上層は約10cmの暗赤褐色砂層で焼土である。内に木炭が含まれている。遺物の検出はできなかったため時期は不明である。中層は、黄色砂層が約50cm堆積している。下層は、若干礫を含む明黄褐色砂層で、その下が横穴墓床面である。天井位置から須恵器甕片が出土しており、丘陵上から転落したものと思われる。

内部構造

残存部の全長3.3ｍ、平面形は玄室と羨道部の明確な区別はなく、羨道部から徐々に広がりをみせ、ほぼ平行に奥壁に達する。一升ビンを横にした様な形で、玄室は隅丸方形を呈し、奥壁幅は1.65mである。床面は、奥壁から羨道部に向かって低くなり、やや傾斜をもっている。床面から天井方向にやや胴膨らみの形を呈し、天井部は土取りですでに削りとられているが、立面形はアーチ形と推察される。

出土遺物

他の横穴墓に比べ遺物が多く出土している。土師器甕１点・土師器長頸壺１点・須恵器高杯１点・須恵器杯３点・須恵器蓋２点・須恵器高杯片１点・鈎帯金具(一部)・鉄片２点・鉄釘10点・人骨２個体である。

遺物の出土状況は、中軸線の左側からは須恵器杯２点と土師器甕と鉄釘で、他は全て右側から出土している。人骨２体は中軸線より右側に、頭を奥壁側にして２体ならんだ状態で出土している。また、中軸線中央やや羨道部よりに長径20cmの赤色顔料が付着した石材が出土している。

3節　周辺のトレンチ

今回調査した7・8・9・10号横穴墓を見ると、ほぼ等間隔にならんでいる。丘陵先端部分で3号横穴墓が確認されており、4号横穴墓との間の横穴墓を確認するために丘陵の東側に丘頂部から丘陵裾にかけ、E1・E3・E5・E7・E8・E10・E11・E14トレンチを設定した。また、4号横穴墓や5・6号横穴墓のレベルをみると、65～66mに位置していることから、同レベルに沿って横にE2・E4・E6・E9のトレンチを設定した。部分的に暗黄色砂層・黄色砂層・黄褐色砂礫層がみられるが、表土の下は地山層に続いており、大きな土層の変化はみられず横穴墓の確認はできなかった(図版8)。6号横穴墓の南の丘陵の残存の良い部分でも横穴墓の確認のため、E28・E29・E30のトレンチを設定したが、地山の上は、褐色砂礫層および灰褐色砂礫層が50～60cm続き、層の変化はみられず横穴墓の確認はできなかった(図版6)。なお、今回調査した10号横穴墓と5号横穴墓の間は竹林の開墾が丘陵腹部までされていたため、横穴墓の痕跡も留めていないが、横穴墓関連遺物として報告している10号横穴墓より南の竹林で採集している遺物等から、10号から5号横穴墓までにも横穴墓があった可能性がある。丘陵西側にもトレンチを設定したが西側は砂防工事や土砂の流出でかなりもとの地形とかわっている。地山の上には黄褐色砂層や砂礫層が深く堆積しており、深い部分では2m近くにもなっている。W5トレンチでは、表土下2mの黄褐色砂層中に横穴式石室の石材が含まれており、丘陵裾にいくほど地山は深くなっている。W11・W13・W14トレンチでも7号墳から流出した円筒埴輪片が出土している。丘陵奥の西側裾で木炭のつまった須恵器の大甕が単独出土しているため、今回の調査でもW11～W17の7つのトレンチを設定したが、遺物や遺構は検出できなかった。

E26トレンチは、表土の下はすぐ地山になるが、雨水で浸食され溝状になった部分から鉄斧片が出土している(図版15)。

弥生式土器が出土したT3トレンチより丘陵端にかけて尾根はやや広くなっているが、表土下すぐ地山になったり、地山が露出している状態である。T2トレンチでは、黄褐色砂層の下、地山層を切り込んで幅約1.2m、深さ約50cmの凹んだ状態が見られ、中に黄色砂礫がつまっていた。このため、W3・E12・E8トレンチを拡張・設定したが広がりがみられなかった。E12・E8トレンチでは溝状の遺溝が確認されたが、いずれも遺物等の出土はなく、いつの時代のものであるか不明である。

4節　弥生時代の遺構

4号墳から丘陵は徐々に低くなり、丘陵先端にかけてはやや平坦な丘陵となるが、表土もなく地山面が露出している。

T3トレンチの南端で表土下10cmで、赤褐色砂層中より弥生式土器がおしつぶされたような形でまとまって出土した。復元の結果、第Ⅳ様式の小形甕・甕形土器・底部の3個体であることがわかった。この層中よりわずかな木炭片が検出された。西尾根に1.5mトレンチを拡張し精査したが、すぐ地山となり、遺物・遺構の検出はできなかった。

E20トレンチで地山上層の黄褐色砂礫層中からも弥生式土器が出土している。高杯片・壺口縁部・底部など磨滅度の大きい小破片がトレンチ全体から出土している。この出土の位置は4号墳の前方後円墳の前方部にあたり、古墳築造にさいして壊され、古墳の盛り土に使われたものである。

田辺町内においては、丘陵上から弥生時代の遺物の出土が報告されることがしばしばある。田辺丸山の興戸5号墳の方形台状墓の報告例[8]もあるように、今後古墳の調査とともに丘陵上の弥生時代の遺物・遺構についての調査・研究が必要であろう。

第Ⅳ章　遺　　物

人物埴輪（図版9－1）

7号墳の南側周溝部を中心に発見され、一部は山の西側下より転落したものを採集した。焼きは堅く、須恵質でやや褐色を呈している。頭部にはミズラの髪の上に冠状のかぶり物をのせ、左側前頭部に直弧文を付けている。鼻にも先端を中心として翼状に二本を基本とする直弧文を入れている。直弧文は、冠の左前、鼻上、顎の三ヶ所に入れられている。衣服は、衣のみの袷(あわ)せになっており、腰ベルトには、日常用の刀子とふくろ状の物が取り付いている。刀子の柄頭はワラビ手刀を表わしている。腰の裾は、やや焼け歪んでウェーブがかかる。ここには、大型器台に見られるハケメが横線を主体として装飾的に付けられている。手は、簡略化され退化しており指は欠落している。全体より受ける印象は、やや若い成人男子像で、足は円筒部となっている。

頭部人物埴輪（図版9－2）

復元すると上半身のみが現存し、褐色を呈した須恵質で、非常に堅く仕上がり、胸部より下には縦ハケメが装飾的に付けられている。頭頂部は欠損しているが、飾りのある可能性がある。手はまったくぬけ落ちている。出土状況は、7号墳の南側溝でかなり散乱していた。

胸部人物埴輪（図版9－3）

出土地点は、7号墳周溝で、頭部はついに発見できず欠損したままである。頸部に玉状の貼付けが見られ女性像と考えられる。手は片方のみ残っており小さな指が付いている。腰には布製の紐をまき、交差したヘラ描の線を入れている。焼きは強くなく、軟質で褐色を呈している。

馬形埴輪（図版10）

7号墳の南側溝より他の形象埴輪と共に出土し、溝のやや浅い部分にあってまとまって発見された。口部、足の一部、胴の片方と、飾りの部分がかなり失くなっている。色調は明るい褐色を呈し、焼きは軟質である。ハケメは、体側に合わせてうすく施され、カキ取り状にはなっていない。顔面はやや長く復元したがもっと短いかもしれない。目付きはいわゆるタレ目で、耳は先端のみ現存していた。馬体に取り付く革帯には、すべて小さな竹管文が鋲として表現されている。たてがみは、稜線上になっているが、毛の表現はない。鞍部も、鐙も馬体にしては小さく表現されている。尾部は付け根のみで復元した。全体の印象は、やや

リアルさに欠けてかなり簡略化した段階であるが、基本的最低限の道具のみを備えている。

円筒埴輪（図版11－1～4）

7号墳の南側周溝部を中心に発見されたもので、すべてに共通する色調は、明るい褐色で、軟質のあまり歪んでいないものである。縦ハケをまず施した後に、はっきりとした横ハケで仕上げている。4個体の内、2個体は（2・4）二段のタガになり、他の2個は、三段のタガを持っている。口縁の直径は、約36cmで、小型化する以前であり、一個体の内面に×印のヘラ描があり、製作者の違いを示していると考えている。

靫状遺物（図版12－1～3）

色調は、暗灰色須恵質で、やや軟質に焼き上っている。丘陵の西側で散乱し多数の破片となっていたもので、全体を復元するには至らなかった。故にその部分を図示するに留め今後の研究に待ちたい。今日まで推定できた案として、靫・盾・陶棺がある。

歪み状円筒埴輪（図版12－4）

7号墳の周溝にあったもので、高さ約48.9cmあり縦に割れた後に、焼き上ったものであろう。色調はやや黒い灰色で、胎土は破質を呈している。タガは二段のみで、強い横ハケが全体に施されている。この遺物は、まったくの不良品であるにもかかわらず、古墳に副葬された点に注目したい。

須恵器蓋片（図版13－1）

9号墳より出土した破片で、復元すると高杯の蓋になる。つまみは失っていたが、口径14.6cmを計し、青灰色で、胎土は良く密である。焼きは良好である。

須恵器高杯（図版13－2）

9号墳出土の有縁高杯で、二段三窓の透かしを開く。杯口径は12.7cm、高さ17.4cm、脚径15.1cmを計す。

須恵器蓋（図版13－3）

4号墳付近の地山上層より出土したものである。外面の屈曲部に、二条の筋が見られる。内外面はロクロナデ調整し、内面には砂つぶが多く見られる。口径は14.2cm、高さ5.0cm、つまみ2.2cmを計し、青灰色で胎土は良く、砂粒を含み焼きは堅い。完形品である。

須恵器蓋（図版13－4）

4号墳関係遺物で、口径15.6cm、高さ5.4cm、つまみ3.4cm、色調は青灰色を呈し、胎土は良好で細かい。焼きは良い。

須恵器蓋（図版13－5）

4号墳関係遺物、内面はナデになり、胎土は細かい。焼きは良好で、色調は青灰色を呈し

ている。口径は15.3cm、高さ5.0cm、つまみ3.5cmを計す。

須恵器蓋（図版13－6）

4号墳の裾（E18トレンチ）より出土し、外面にはハケメのカキ取りがある。焼きはやや軟く、口径は15.4cm、高さ5.6cm、つまみ3.6cmある。

甕形土師器（図版13－7）

上辺と下辺が欠落している。4号墳の下にある溝より出土している。外面には14本の沈線状のカキ取り、下半にはヘラケズリが見られる。

須恵器蓋（図版13－8）

復元口径は15.0cmあり、破片である。9号墳より出土し、青灰色を呈し、胎土は細粒を多く含み良質である。焼きも良い。

須恵器高杯片（図版13－9）

9号墳の西側裾のW6トレンチより出土し、脚部は欠落している。透しは三方に開いている。杯の口径は12.1cmある。

須恵器杯（図版13－10）

横穴墓8号より出土したもので、口径は8.9cm、高さ2.4cmあり、色調は黒灰色、胎土は粗く砂粒が多い。焼きは良い。

須恵器杯（図版13－11）

横穴墓8号より出土したもので、口径は9.0cm、高さ2.6cmあり、色調は青灰色、胎土は砂粒を含む。焼きは良い。全体の成形は雑で、器壁を一定に削っていない。

須恵器杯（図版13－12）

横穴墓8号より出土し、口径8.9cm、高さ2.2cmで、色調は黒灰色、胎土には砂粒を多く含む。焼きは良好である。成形時のケズリは省略されている。ヘラオコシをしたままである。

須恵器杯（図版13－13）

横穴墓8号より出土した。口径は10.0cm、高さ3.2cmあり、ヘラオコシの後に成形したものである。その後全面にロクロナデ調整されて焼け歪んでいる。色調は灰青色で胎土に粗い砂粒を含む。焼きは悪い。しかし、これを一時期古いと考えると、8号横穴墓に二期あったことを認めることになる。

須恵器杯蓋（図版13－14）

横穴墓8号より出土、口径11.5cm、高さ4.1cmある。色調は淡灰色を呈し、胎土は緻密である。焼きは粗悪で外面にはロクロナデが見られる。しかし器壁をうすく仕上げている

ため、一時期古く図版13－13と対になる。

甕形土師器（図版13－15）

横穴墓7号より出土した。口径は12.3cm、推定高10.5cmを計す。頸部は横ナデ調整し腹部上半は、斜めのハケメ調整、下半部はヘラケズリしている。

須恵器高杯片の脚部（図版13－16）

横穴墓9号より出土し小片である。脚の最大径は7.8cmである。色調は灰黒色をし、胎土は緻密で堅い。焼きも良い。

須恵器高杯（図版13－17）

9号墳の東側溝より出土した。最大径は13.5cm、高さ15.0cm、脚径は13.5cmある。二段三窓、中央部に二条の沈線が入る。杯部下半はヘラケズリしている。全面にロクロナデを施し、色調は暗灰色で焼きは良い。

須恵器杯（図版13－18）

横穴墓8号より出土したもので、口径は8.5cm、高さ2.5cmある。成形はヘラオコシによりそのままナデ仕上げしたものである。色調は黒灰色、砂粒を含み、焼きは良い。

須恵器杯（図版13－19）

横穴墓8号より出土したもので、口径は7.7cm、高さ2.8cmを計す。非常に緻密で堅いものである。色調は青灰色で、細粒を含む。焼きは良い。外面をていねいに削り取って器壁をうすくして、全面をナデ仕上している。

須恵器無蓋高杯（図版13－20）

横穴墓8号より出土した。口径は9.9cm、高さ10.6cm、脚径8.5cmを計す。自然釉の付着が杯内側にも見られる。脚の中央に二条の沈線を施し、二段に分けているが透しはない。杯の下半はケズリが入り上半と分けられる。

須恵器平瓶（図版13－21）

横穴墓8号より出土した。腹径は15.6cm、口径6.0cm、高さ16.3cmである。全体にシャープさがなく、首部に沈線を有する。腹部にはカキ取りの横線がわずかに残り乱雑なハケメが見られる。底部はハクリし、色調は灰白色、胎土は緻密、焼きはやや不良。

須恵器杯（図版14－22）

横穴墓9号より出土した。口径10.3cm、高さ3.4cm、胎土は多孔質で砂質である。底部をヘラケズリしている。色調は灰白色で、焼きはやや不良である。

須恵器無蓋高杯（図版14－23）

横穴墓9号の床面にあったもので、口径は9.2cm、二段の「く」字に曲がり二段口縁に

なっている。内外面ともに自然釉が付着し、外面の一部はハクリして胎土は砂を含む。焼きは堅い。色調は青灰色である。

須恵器無蓋高杯片（図版14－24）

横穴墓９号より出土した。口径は12.0cmあり、内外面ともよくロクロナデしている。胎土には砂粒が多く含まれて、下半には、二条の沈線があって二段口縁風に作られている。色調は灰紫色、焼きは良くて堅い。

須恵器杯（図版14－25）

横穴墓８号より出土したもので、ヘラオコシしたままの底部を持ち、ケズリを行っていない。口径8.6cm、高さ3.1cmで、胎土は緻密で所々に小礫を含む。焼きは良い。

須恵器蓋（図版14－26）

横穴墓10号より出土したもので、口径は10.1cm、高さ3.4cm、内面にロクロナデと灰かぶりが見られる。上面にヘラケズリが認められ、焼きは堅く６mm大のハゼや、1.2cmのクッツキも見られる。ヘラケズリ方向は左回転である。

須恵器無蓋高杯（図版14－27）

９号墳東下の溝より出土した。横穴墓関係遺物の一つと考えている。口径は11.0cm、高さ7.8cmあり杯部の中央に一本の凹線が走る。台部のほとんどは欠損しており、焼きは良い。胎土は緻密で、色調は全体に青灰色で一部に茶褐色部分がある。全体は右下りに焼けひずんでいる。

須恵器無蓋高杯（図版14－28）

９号墳の下にある溝より出土した。口径は11.0cm、高さ7.5cm、脚径8.0cmある。杯部内面はロクロナデ調整し、外面下部でヘラケズリが見られる。胎土は礫を含むもので多孔質である。焼きはやや不良である。

須恵器無頸小壺（図版14－29）

４号墳下の溝より出土した。口径は6.0cm、最大腹径12.5cm、高さ11.1cmあり完形品である。最大腹部に、うすい２本の横線が認められる。下半部にはヘラケズリが認められ、色調は、灰黒色を呈し、胎土は緻密、焼きは堅い。上半部に≈形のヘラ描がある。

須恵器杯（図版14－30）

横穴墓10号より出土したもので、口径は9.7cm、高さ3.4cmある。粗いヘラオコシによる切断を残すもので、焼きはやや軟質で淡灰色を呈している。

須恵器無蓋高杯片（図版14－31）

横穴墓10号より出土した。口径9.0cmあり脚部は失われている。杯部内面にハクリ状のザ

ラ面が認められる。外面の成形はシャープに仕上がり、焼きは堅く、濃いネズミ色を呈している。

甕形土師器（図版14－32）

横穴墓10号より出土した。口径12.6cm、高さ9.7cm、肉厚4mm、かなり風化が進んでいる。上腹部には縦に荒いハケメが斜めに入り、下底部には横にカキ取り状の細かい横ハケメが見られる。内面の底に指圧状の圧痕が認められる。

須恵器杯（図版14－33）

横穴墓10号より出土した。口径9.4cm、高さ3.2cm、左回りのヘラオコシが見られ、ヘラケズリをしていない。表面に灰かぶりが見られる。

須恵器杯（図版14－34）

横穴墓10号より出土した。口径9.1cm、高さ2.6cm、上半はロクロナデし、下半にはヘラオコシしたままの痕が残っている。胎土に石英質の粒を認める。

須恵器杯蓋（図版14－35）

横穴墓10号より出土した。口径10.0cm、高さ3.3cm、やや内湾気味にうすく成形され、上天部には荒いヘラオコシが認められる。色調は明灰色で堅い。

須恵器杯（図版14－36）

横穴墓10号より出土した。口径は9.5cm、高さ3.0cm、色調は灰色で、上端部はロクロナデ仕上し、下半はヘラオコシしたままで、擦消し状になっている。内面はやや小豆色を呈している。

長頸壺形土師器（図版14－37）

横穴墓10号より出土した。口径5.3cm、頸部の長さ3.5cmである。下腹部は欠損している。大変美しい濃い朱色を呈し、細頸部には縦方向の暗文が、上腹部には横に分割された暗文が見られる。内面には段があって巻き上げの痕跡が認められる。

須恵器甕形片（図版14－38）

4号墳より出土した。復元口径24.0cmあり、灰色の堅いものである。口縁部に二段の波状文と二条の凹線がある。

弥生式土器（図版14－39）

第Ⅳ様式の甕形土器で図版14－43と接合する可能性がある。共に頂上部の4号墳東側で出土した一群である。

小型甕形土器（図版14－40）

4号墳の東、T3トレンチより出土した。口径6.6cm、高さ7.0cmあり、手づくねで成形

したもので、赤褐色を呈し口縁部は横ナデ、内面は指圧痕が多くのこり、外面には不鮮明なハケメ調整が認められる。

頂上部のＴ３トレンチには、(図版14－41・42)もあった。いずれも弥生式土器の底部で、一つは甕の一部で、他方は甑(コシキ)の一部でススが付着している。以上の弥生式土器の一群は、ススが付着しているため、単なるキャンプ地ではなく、小型甕形土器もある所よりして、古墳墓等ではなく、何かを祭った遺構と考えたい。

壺形土器（図版15－44）

４号墳北東のトレンチより出土した。口径11.5cm、口縁部は横ナデで、縦ハケがある。白色粒が多く、色調は黄褐色である。

須恵器蓋（図版15－45）

９号墳より出土した。最大径は12.0cm、高さ4.1cm、つまみ2.8cmである。色調は濃い灰色を呈し、外面は横線が強く残るカキ取り調整が施されている。

須恵器蓋（図版15－46）

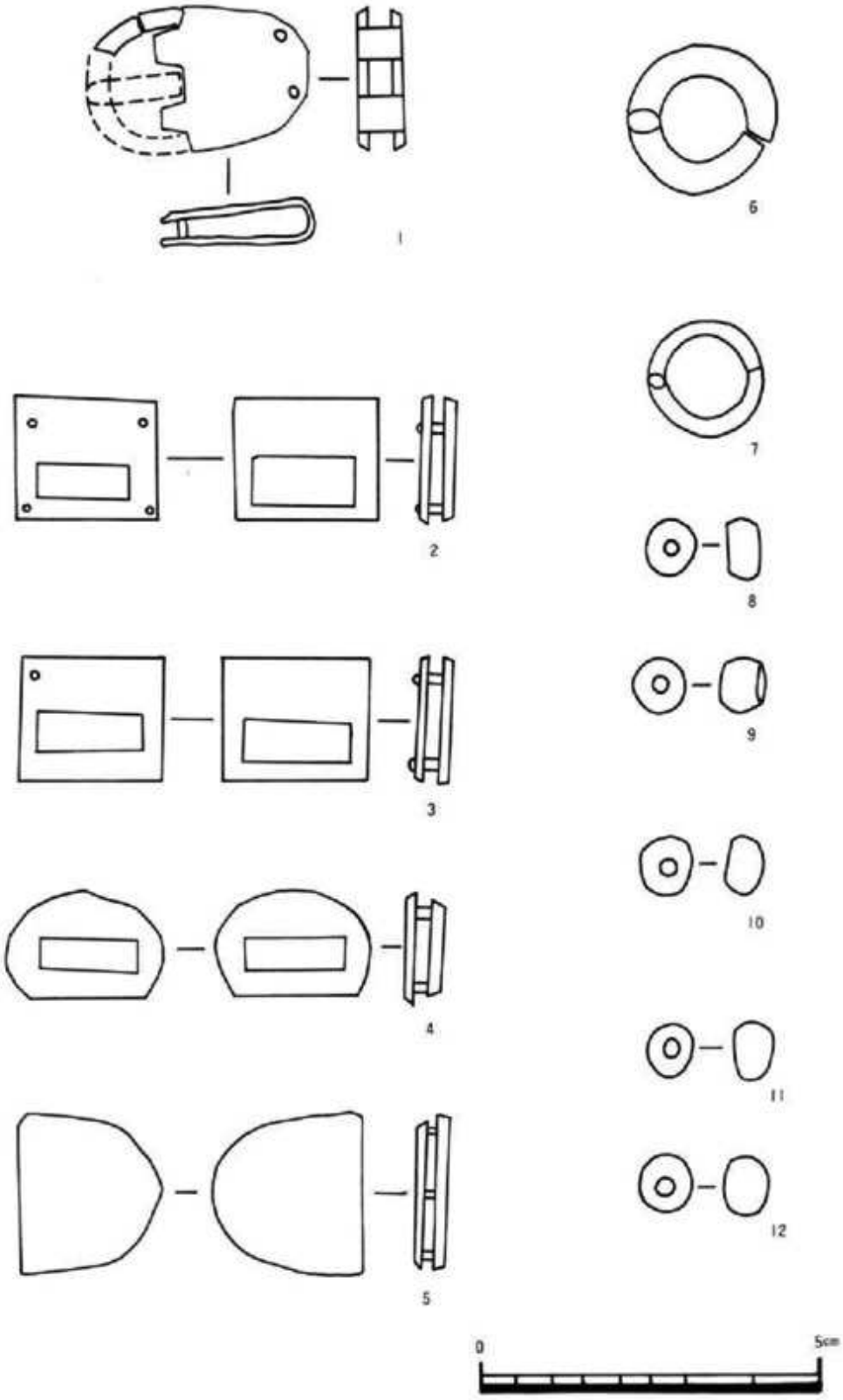
９号墳東斜面の下より出土した。上半部はヘラケズリされ、下半部はロクロナデである。復元口径は14.2cmあった。

須恵器無蓋高杯（図版15－47）

横穴墓10号より出土した。口径10.1cm、高さ9.5cm、脚径8.3cmある。杯部には、強い火力のため釉のハクリが認められ、杯外下半にはヘラケズリがあって全面に黒い自然釉がふき出している。

須恵器大型器台（図版15－48）

７号墳のやや東側の溝の中より発見したもので、上部が残っており、下部はかなり散乱して出土した。波状文はかなり簡略化されている段階のもので、焼けひずみが進行し、色調は暗灰色を呈す。胎土は歪んだ円筒埴輪に近い。



第6図　10号横穴墓出土銙帯金具、9号墳出土銀環・ガラス小玉実測図

銙帯金具（第６図1～5 銅製）

1：止め金具

最先端に取り付く、ベルト止め金部分である。ピンに当る部分は失われていたが、環状部は２片ばかりあった。推定の左右は3.3cm、上下2.1cm、厚さ0.7cmである。

2：巡方

縦1.8cm、横2.1cm、厚さ0.5cm

3：巡方

縦1.8cm、横2.1cm、厚さ0.5cm

4：丸鞆

縦1.6cm、横2.3cm、厚さ0.5cm

5：尾具

縦2.3cm、横2.1cm、厚さ0.4cm

以上すべて10号横穴墓より出土した。本来のセットは、もっと数多いはずであるが、上記部分しか存在せず、かなり早い時代に失われたものと考える。横穴墓中では、最も新しい時代に属する遺物である。

銀環（第６図６）

９号墳より出土した。上下2.2cm、環部4.5mm、鍍金がはげ落ちてしまったのか、銅の地肌が露出している。

銀環（第６図７）

９号墳より出土した。上下1.7cm、環部2.5mm、掘り上げた時は銀色を呈していたが、空気に触れると黒く変色した。これは銀の持つ特性である。

ガラス小玉（第６図８～12）

９号墳の奥壁床面より出土したもので、色は深いブルーのガラス製、５個のみ検出した。各玉の大きさは８：９mm×4.5mm、９：８mm×７mm、10：8.5mm×5.5mm、11：８mm×６mm、12：９mm×6.5mmである。

ま と め

薪地区は、井手川が東流する際に出来た扇状地を中心として展開した、一種の歴史的小単位である。一つの水系に完結した自立的生産単位（自給自足）は、生まれてから死ぬまでの生活が連続して繰り返されて、古代・中世・近世を通じて存在し続けた単位を言うのである。扇状地の北西丘陵上には、狼谷遺跡（弥生時代第Ⅲ～Ⅳ様式）が最も古い遺跡としてあるが、平野部の集落跡は発見していない。この後500年おいて、6世紀中葉になってから薪遺跡やゴーシ塚古墳・畑山古墳・堀切古墳等がつくられた。薪遺跡は、6・8・9世紀、13世紀の遺物が採集でき、かつ石清水文書にも記載されている所より今日まで続く集落であるといえる。また集落の西には、甘南備山があって山全体が御神体の古い信仰形態をのこしている。この山のおかげで一年中水がかれず、谷と平野部を潤している。これは、安定した農業生産を行う上において極めて重要であり、歴史的小単位の存続に欠かせない条件である。以上を考慮に入れて堀切古墳・横穴墓を考えてみよう。

堀切古墳群は、丘陵上の横穴式石室古墳群と東斜面の横穴墓群によって構成され、前者は、6世紀中葉[9]を、後者は7世紀前半[10]を与えることができる。丘陵墳群は、甘南備山の変成岩を組み合わせた横穴式石室墳を中心として、埴輪を持つものとそうでない二種がある。今回の調査では、7号墳のみに埴輪が多量にあることがわかった。他にもう一ケ所最も奥の古墳に埴輪を確認している。薪地区にある埴輪を有する古墳は、ゴーシ塚2号墳（消滅・鳥形埴輪[11]）・天理山2号墳（円筒埴輪）と上記の二例と合わせて、四例を上げることができる。山城盆地における象形埴輪は、城陽市冑山古墳[12]・長岡京市内[13]・木津町市坂古墳群[14]などで、発見されつつある。特に市坂古墳の東側では、5世紀後半の埴輪窯3基[15]が発見され、古墳の近くで造られていたことが解った。これは、今後の埴輪を研究する上で、極めて重要な意味がある。

堀切7号墳は、主体部こそ明確に出来なかったが、人物埴輪3体・馬形埴輪1体・円筒埴輪5本以上があり、周溝部において全て発見され、一部周辺部のものと接合できた。中でも歪み割れた円筒埴輪を使用している意味は、不良品をも使用しなければならない状態にあったといえる。一つには、埴輪専用窯で焼成されなかったためと考えられる。人物埴輪のスカート部の技法が須恵器工人のものである点を重く考えるなら、パートタイム的な仕事として須恵器窯で焼かれたためで、予備がなく、必要に応じ再生産されなかったための結果としなくてはならない。又このような不良品を使用し、それでも一応の満足が得られる段階にまで、墳上祭祀が重要視されていなかった段階にさしかかっていたと言えよう。

堀切古墳頂上墳の中心を成すのは、その位置からして4号墳である。これは不完全ながら前方後円墳の可能性を残しているからである。しかし内部主体は、ほぼ失われていたため比較できないのは残念である。古墳群はさらに南へと進められており、少なくとも全体の半分を調査したにすぎず、その全体を論じることはできない。

遺物の上では、6世紀中葉の須恵器がほとんどであるから、かなり連続して一族の墓が営まれたものと考える。又人物埴輪の頸の三ヶ所に施された直弧文は、古墳時代を通じ、石棺、石枕、各種の埴輪、剣等に付いている例が多く、葬送に関係した文様として重要な意味を持っていたはずであるが、この時期を境として失われるのはどうしてであろうか。500年以上も続いた伝統が消滅するのには何か葬送に対する大きな意識の変化があったとしか言えない。そうすれば、墳丘を持たない古墳の出現も自然と解明できるように思える。

7世紀になると、引き続いて横穴墓が出現する。それも突然ではなく、6世紀中葉頃より少しずつこれに移行すると言える。八幡市にある美濃山狐谷横穴墓群[16]では、6世紀後葉に出現し7世紀に全盛を極め8世紀にも続くという結果を得ている。これはほぼ当横穴墓にもあてはまり、8世紀の遺物としか言えない銅銙帯が副葬されていたことでも証明されよう。横穴墓がはたして個人墓であるのか、家族墓であるのかは結論の分かれる所である。今ここで発見されている例を整理すると、4号、5号、6号は一体埋葬であり、その内6号は、石棺によって葬られている。4号、5号は遺物も少なく直葬であったと言える。7号、8号、9号、10号は追葬が認められ2体以上あり、中に棺台石があるため、木棺を使用した痕跡がある。遺物においても7世紀前半に二期の隔りがあると言えよう。少なくとも複数二世代は使用されたと言える。故に個人墓として当初は使用されたものが、家族墓にも使用されたと言えるのではないか。意義付けを行なうと、横穴式石室墳の簡略型として出現した横穴墓は、本来有力家長の墓であったが、家父長的支配権がゆるやかになっていく過程で家族墓に転化し、個別的に造営されその数を増大させたものと考えられる。もはやゆるやかな大家族的家長支配は崩壊し、個別戸が成立し、権威の継承儀礼たる盛大な葬礼を必要としなくなり、権威の源泉が祖霊から国家へと移行したことを物語っている。

調査された八幡市美濃山の狐谷横穴墓群は、一体埋葬と複数埋葬が認められ、他に関連した火葬跡もあることがわかっている。しかし堀切6号横穴墓のような旧来の石棺を持つものはなく貧富の差を認めることはできない。この点横穴式石室墳より移行した堀切横穴墓とは、発展の仕方が違うのである。しかし個々の横穴墓を細かく比較するなら、多少の変化があり、何を意味するのかは今後の課題となろう。

最後に山城盆地における7世紀古墳のあり方を述べて研究の方向付けを行なっておこう。

広沢池周辺グループ[17]は、根強く墳丘を造りつづけ最後まで伝統を失わず、横穴式石室墳を造り続けた。六条山、旭山、井手町小玉岩グループ[18]は、横穴式石室を造り続けるが、山頂部の裏や人目にふれないよう、密かに造り伝統を保持したもので、石室は小型化し、ついに天井部から入れるまでになる。消極的に伝統を保持したものと言える。最後に八幡、田辺グループは、横穴式石室墳をやめ、洪積層に穴を掘る方法によって墳丘を作らないで埋葬する方向を見い出したものである。これは伝統廃棄型とでも言えるのである。この例は、全国各地に最近発見されているグループであり、比較研究上きわめて魅力あるテーマを提供し、古墳消滅の問題を考察する上で、また、大化の薄葬令の意味についての鍵を握っているものと信じる。

註

1) 谷岡武雄『平野の開発』1964年 古今書院
2) 同志社大学校地学術調査委員会編 「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 I 1980年 田辺町教育委員会
3) 1966年3～4月の間に、栗野毅・西川滋等により調査された。おもに東西方向・幅約2mの溝を検出し、6世紀後半の遺物を多数発見した。
4) 田辺郷土史会編『田辺町郷土史・古代篇』1959年
5) 村田太平編『京都府田辺町史』1968年 田辺町
6) 高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1969年 京都府教育委員会 6号横穴墓は、組合式石棺を持つが、付近に類例が今だ発見されていない。
7) 前掲6)にある。
8) 奥村清一郎・西川英弘「興戸古墳群発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2 1981年 田辺町教育委員会
9) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966年 平安学園
森 浩一「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁全集』1 1958年 河出書房新社
10) 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 1982年 国立歴史民俗博物館
杉本 宏編「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』3 1983年 宇治市教育委員会
白石氏のb（7世紀初頭～7世紀中葉）で、豊浦寺系瓦と共存する時期を考えている。

11) 西川　滋「京都府田辺町郷士塚2号墳出土の鳥形埴輪」『古代学研究』20　1959年　古代学研究会

12) 堤圭三郎「青山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1967年　京都府教育委員会

13) 山口　博「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』9　1984年　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　人物埴輪は、残存高47cmを測る。腰にはひも状のものをつけており、堀切古墳の人物埴輪と同タイプで、大きさも近く、アワセになっていると思われ、時期は川西編年V期としている。

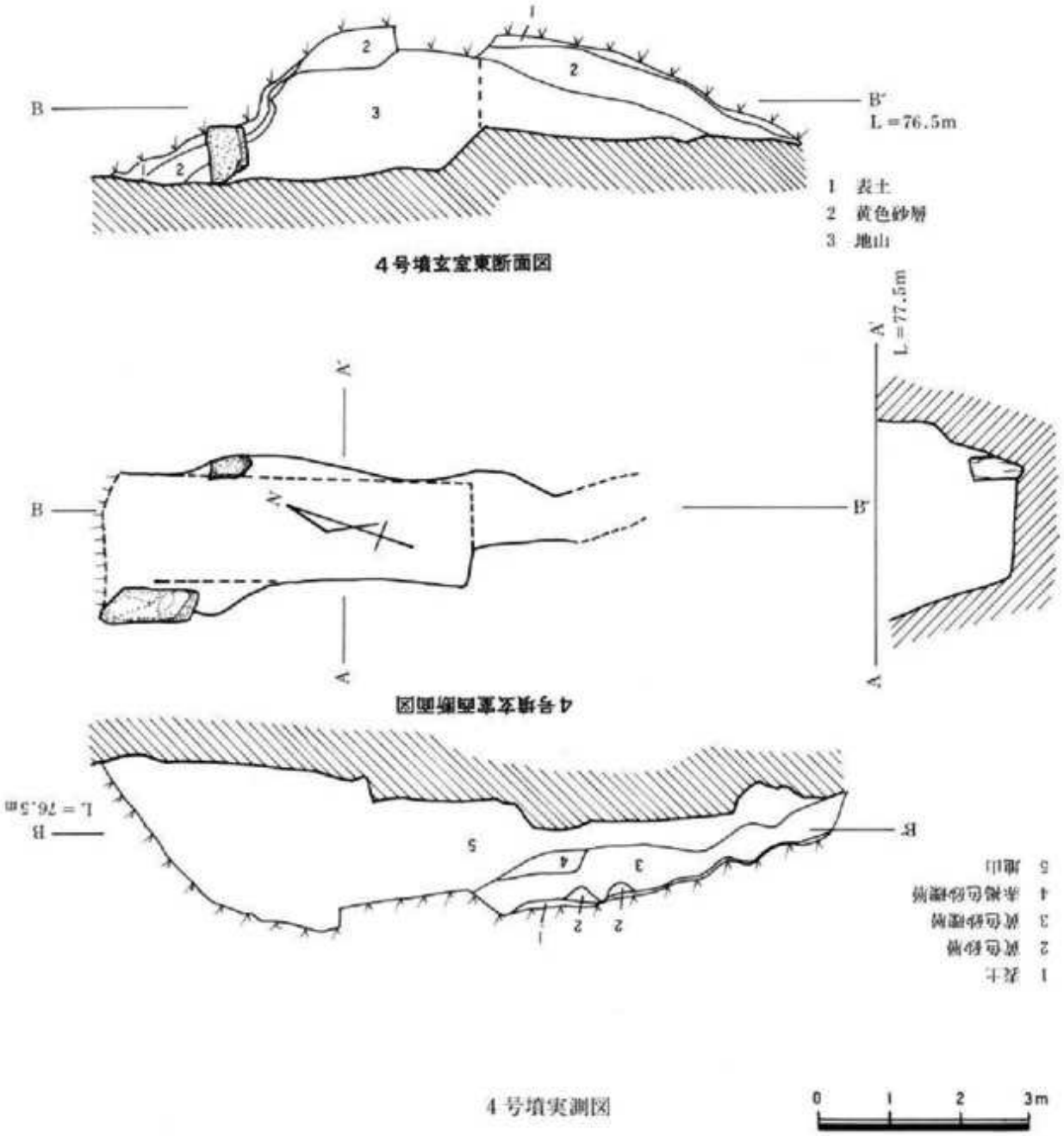
14)・15) 松井忠春・小山雅人「上人ケ平遺跡」『京都府遺跡調査概報』17　1985年　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターに一部報告されているが、全容は継続調査を待たねばならない。現在までにホタテ貝型の市坂1号墳を中心として円墳・方墳が多数とりまいていることが分かった。その東側では、3基の埴輪窯跡が確認され家型埴輪等が出土し、5世紀後半から末葉を考えている。

16) 久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』5　1982年　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

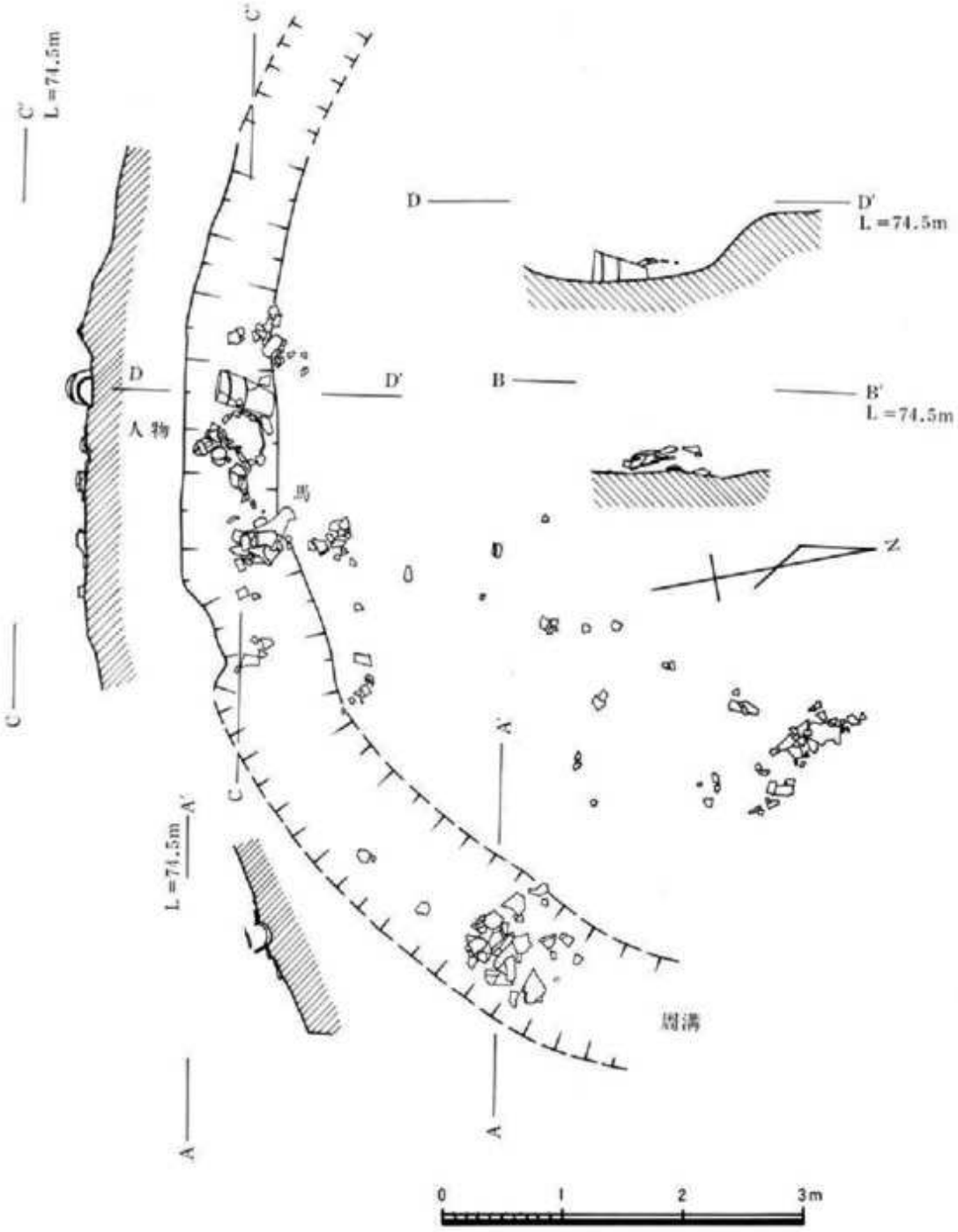
17) 京都大学考古学研究会編『嵯峨野の古墳時代』1971年　京都大学考古学研究会出版事務局

18) 福島雅儀他「小玉岩古墳群」『井手町文化財調査報告』1　1979年　井手町教育委員会

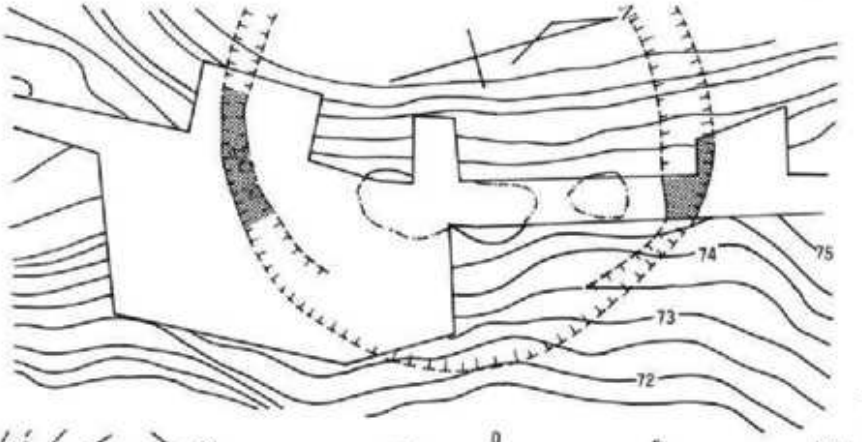
図　版


1 表土
2 黄色砂層
3 地山
B
B'
L=76.5m
4号墳玄室東断面図
A
A'
L=77.5m
B
B'
4号墳玄室西断面図
1 表土
2 黄色砂層
3 黄色砂礫層
4 赤褐色砂礫層
5 地山
B
B'
L=76.5m
0 1 2 3m

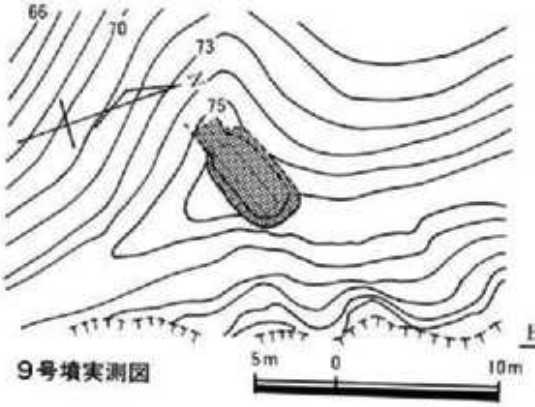
4号墳実測図



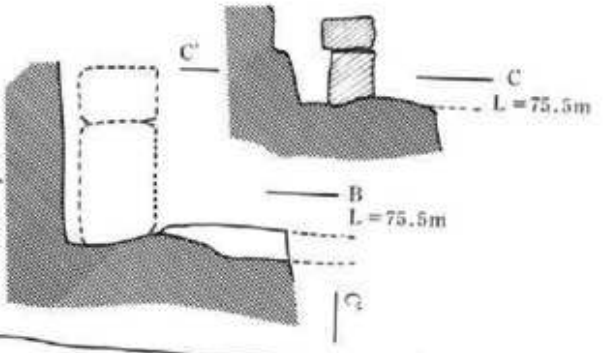
7号墳埴輪出土実測図

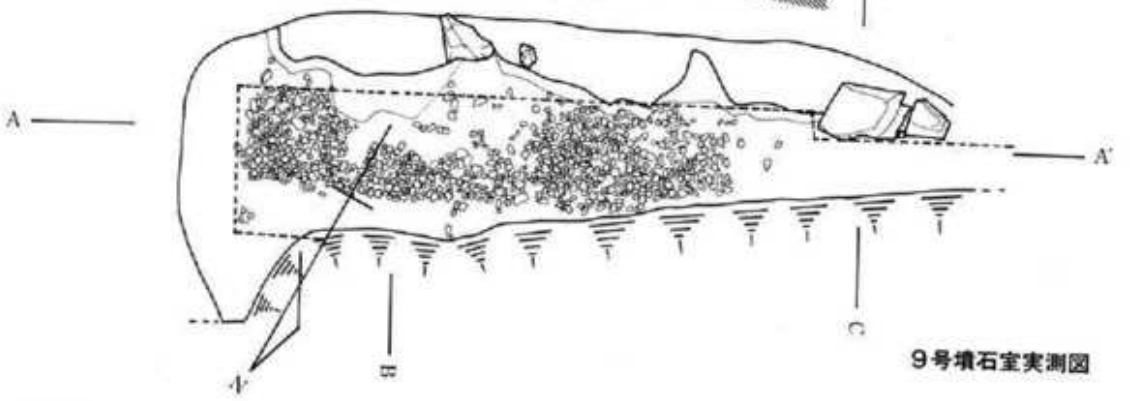


7号墳実測図

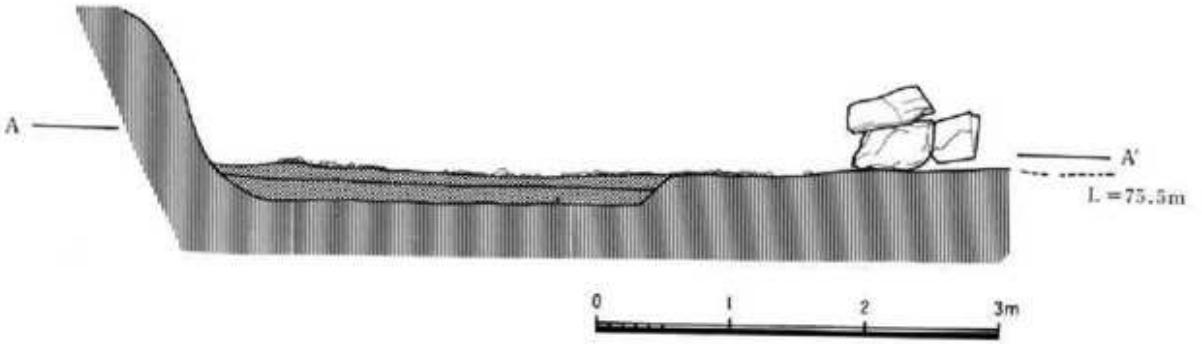


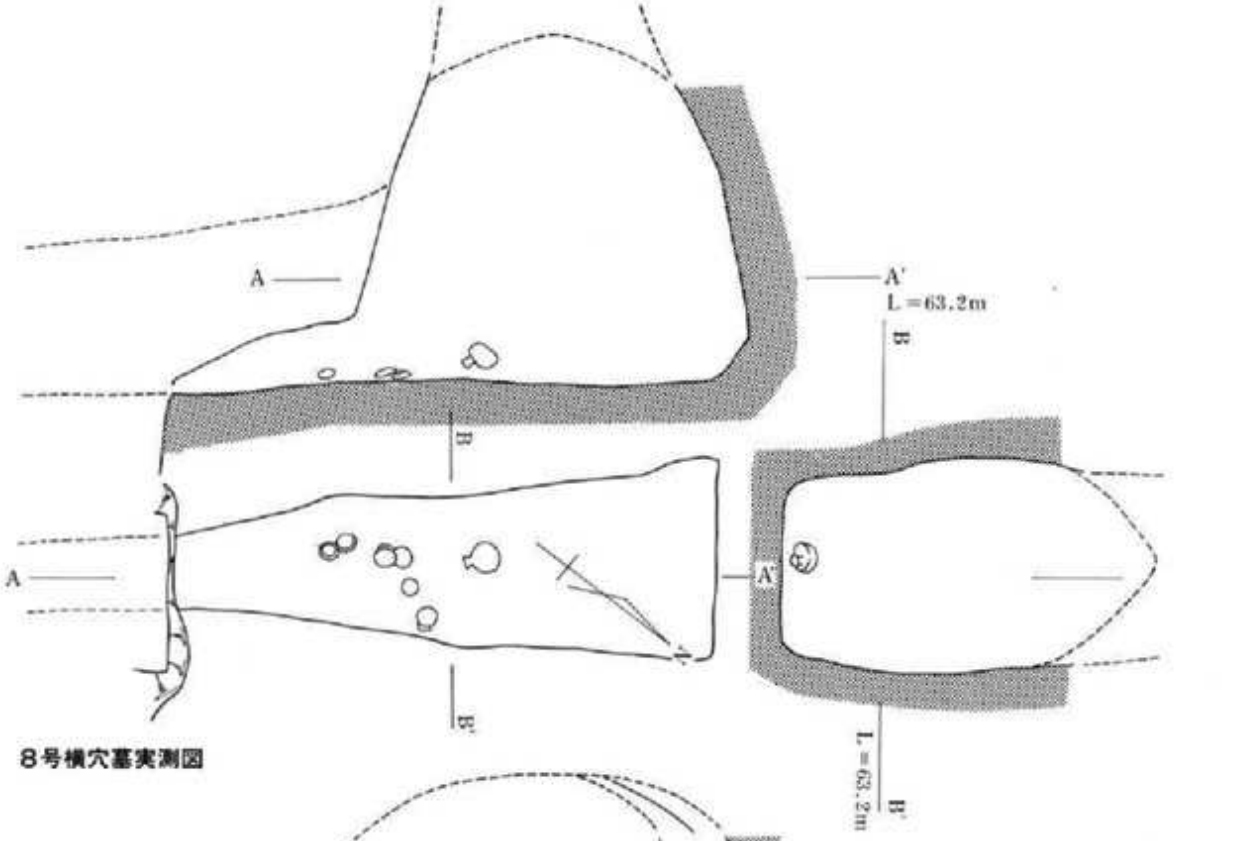
9号墳実測図



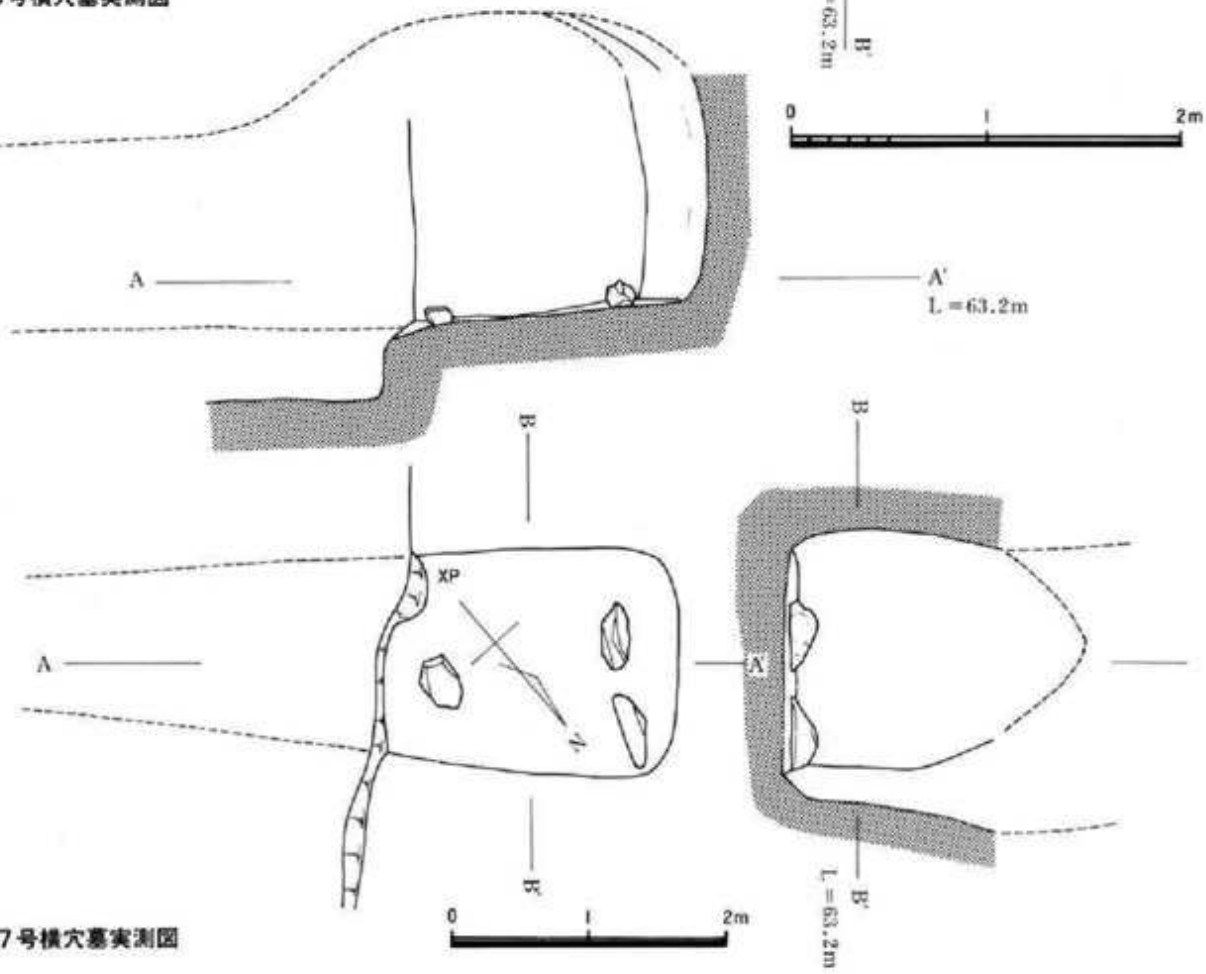


9号墳石室実測図

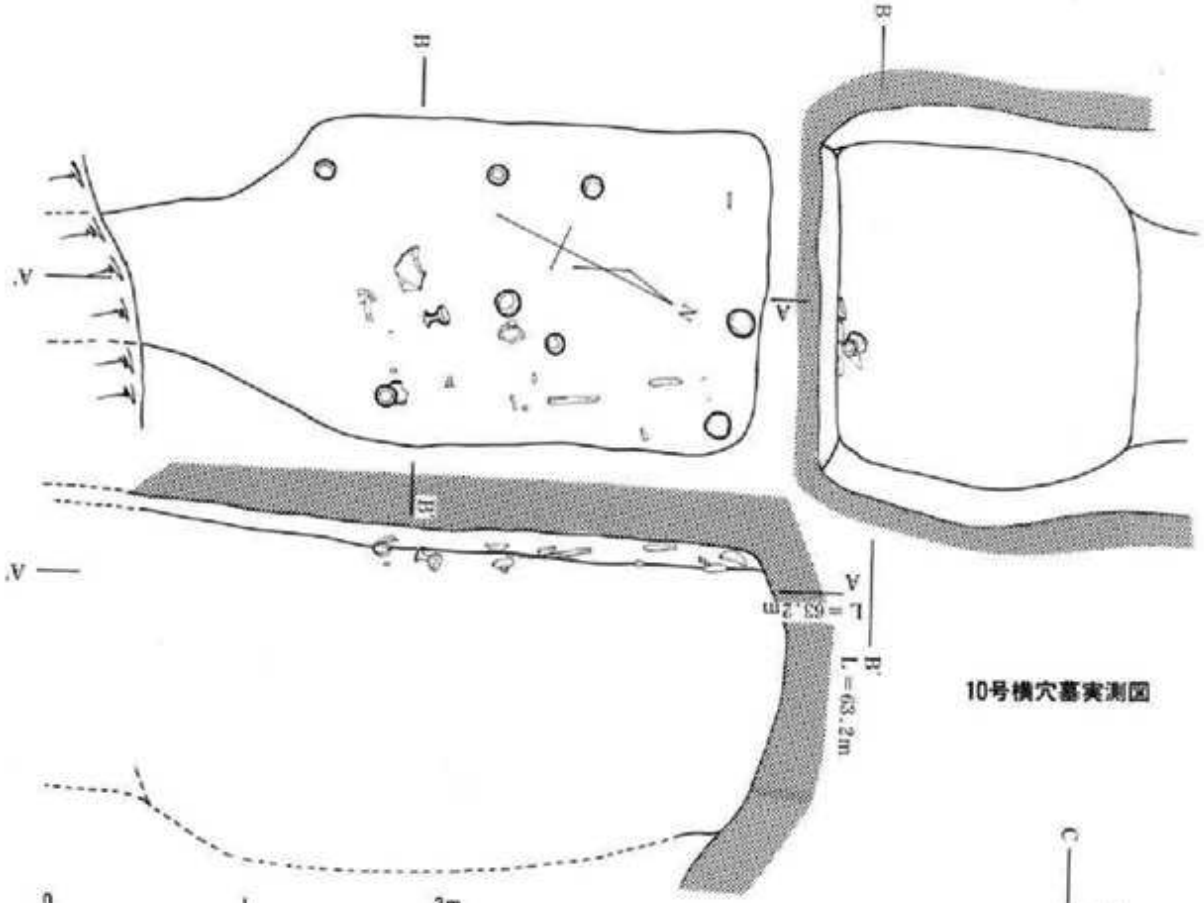




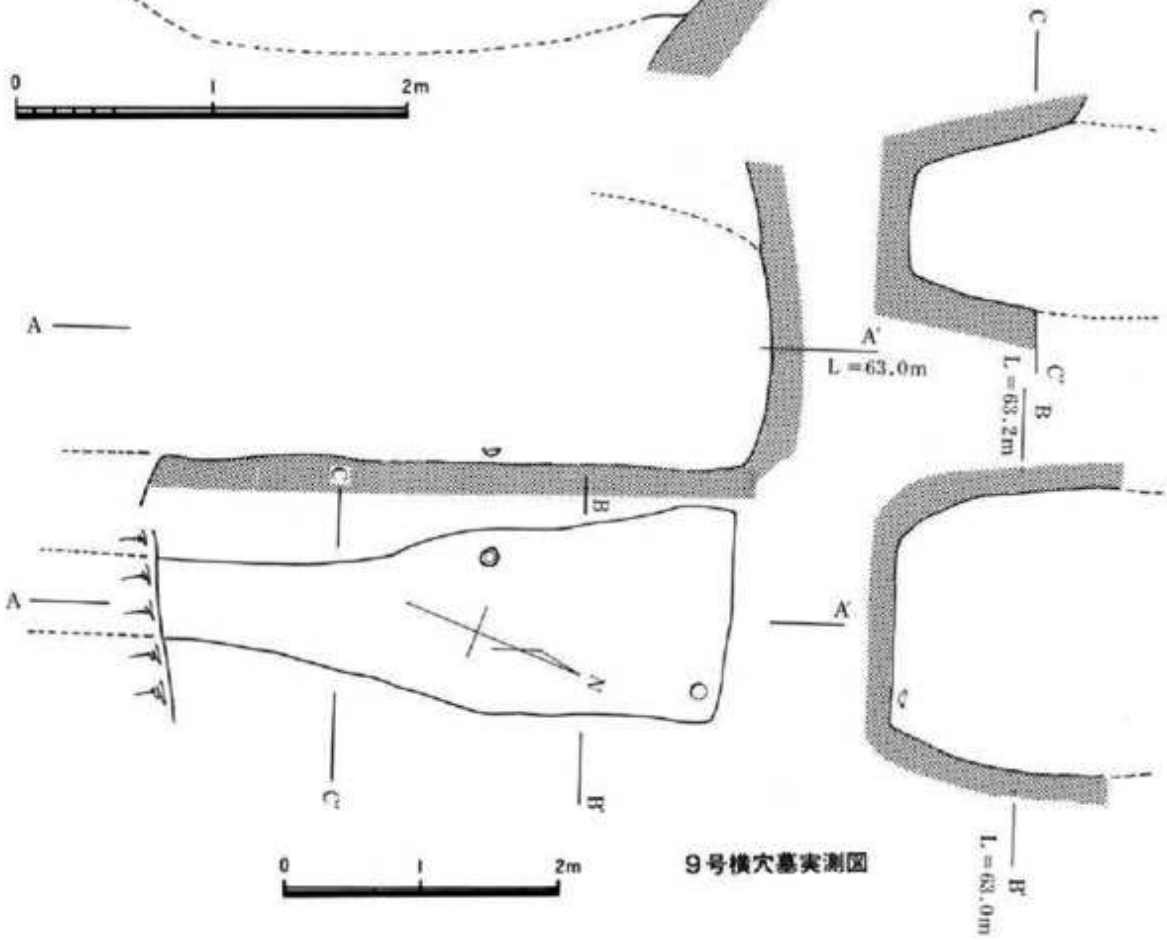
8号横穴墓実測図



7号横穴墓実測図



10号横穴墓実測図



9号横穴墓実測図

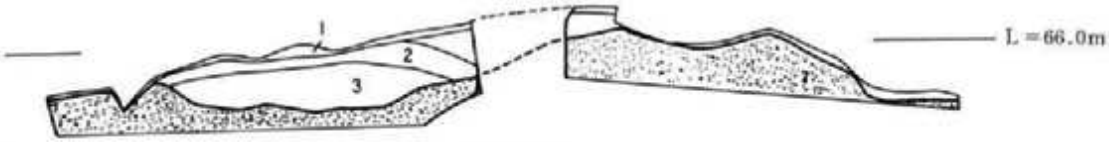
図版 第6

1 表土
2 褐色砂礫層

T10トレンチ南北断面図

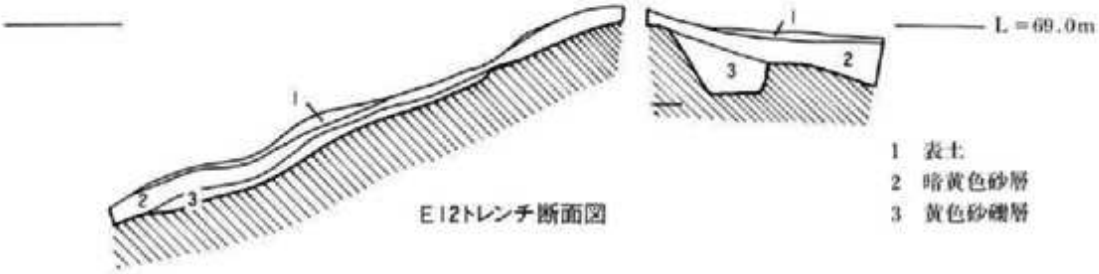
1 表土
2 灰褐色砂層
3 灰褐色礫層

E28トレンチ南北断面図



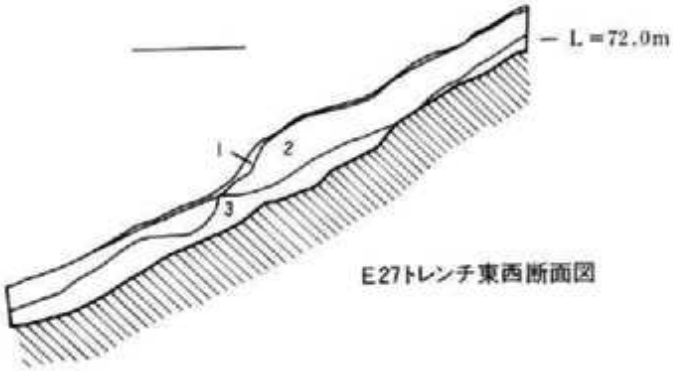
1 表土
2 暗黄色砂層
3 褐色砂礫層

E9トレンチ南北断面図



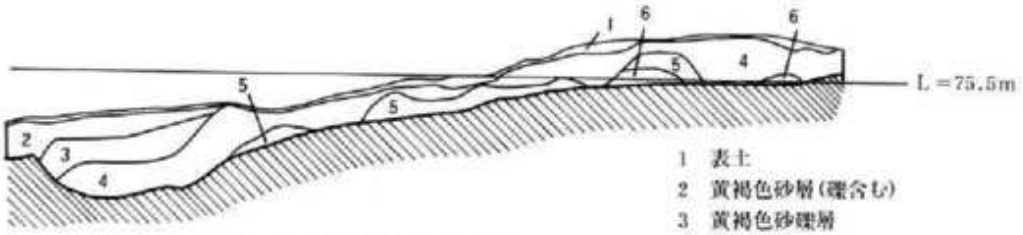
1 表土
2 暗黄色砂層
3 黄色砂礫層

E12トレンチ断面図



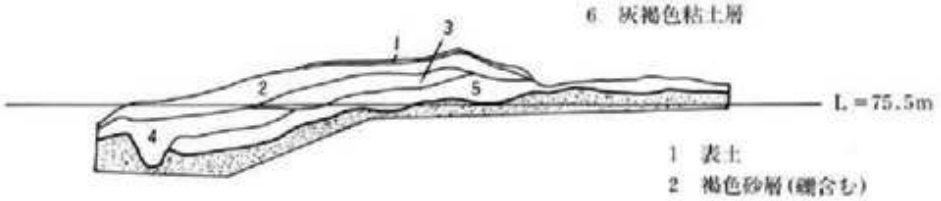
1 表土
2 灰褐色砂礫層
3 赤褐色砂層

E27トレンチ東西断面図



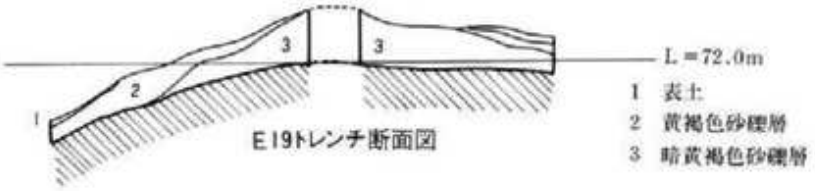
1 表土
2 黄褐色砂層(礫含む)
3 黄褐色砂礫層
4 黄色砂層
5 赤褐色砂層(礫、粘土含む)
6 灰褐色粘土層

T5トレンチ4号墳墳丘南側断面図



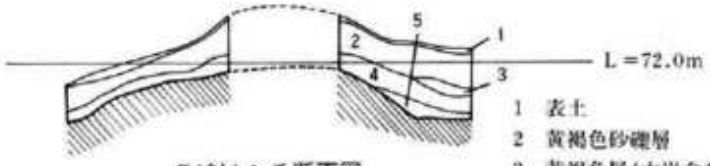
1 表土
2 褐色砂層(礫含む)
3 褐色砂層
4 赤褐色砂礫層
5 褐色礫層

T6トレンチ東西断面図



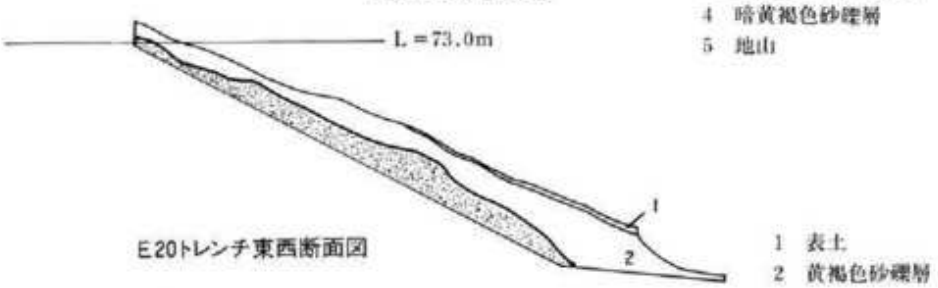
1 表土
2 黄褐色砂礫層
3 暗黄褐色砂礫層

E19トレンチ断面図



1 表土
2 黄褐色砂礫層
3 黄褐色層(木炭含む)
4 暗黄褐色砂礫層
5 地山

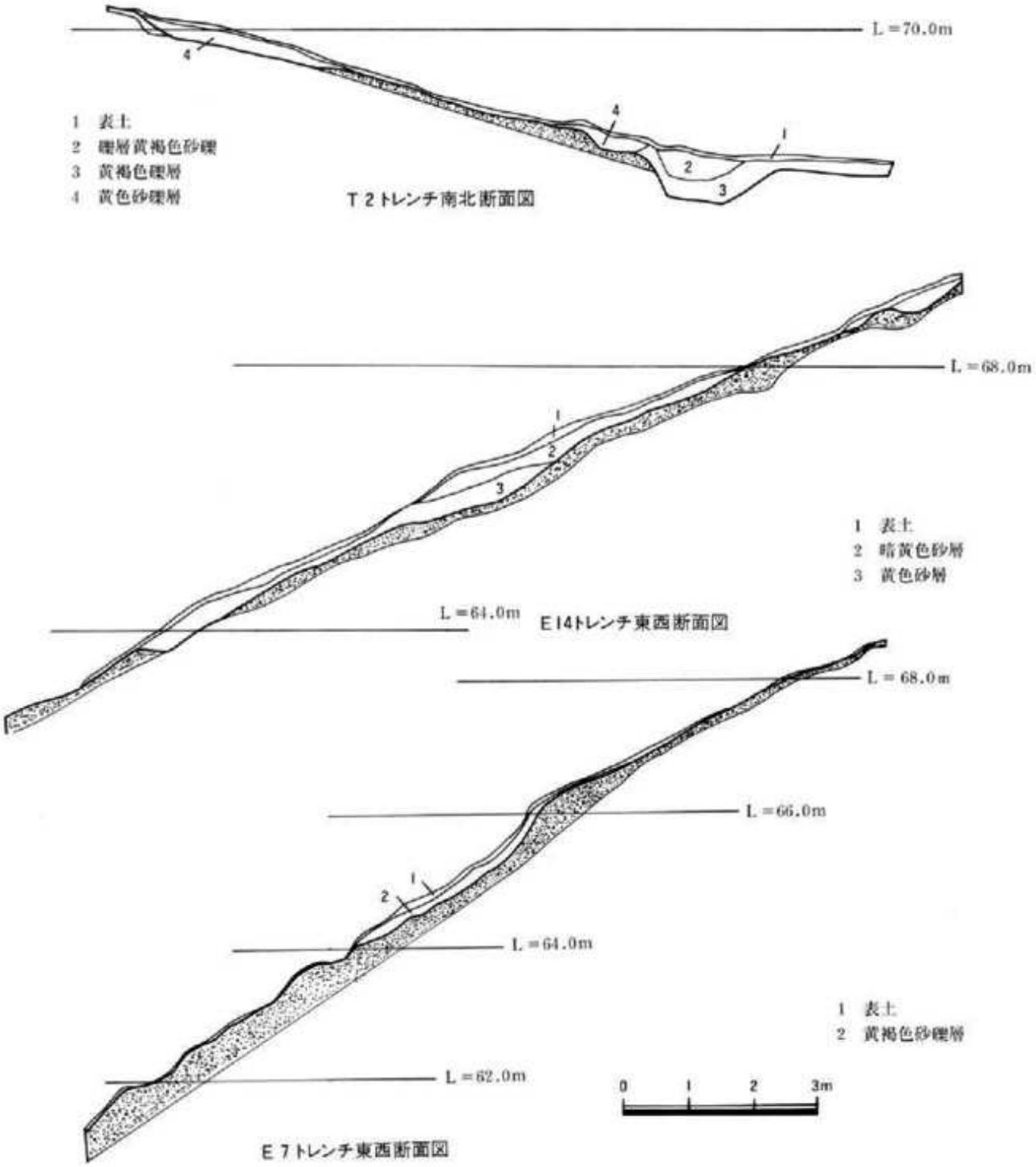
E18トレンチ断面図

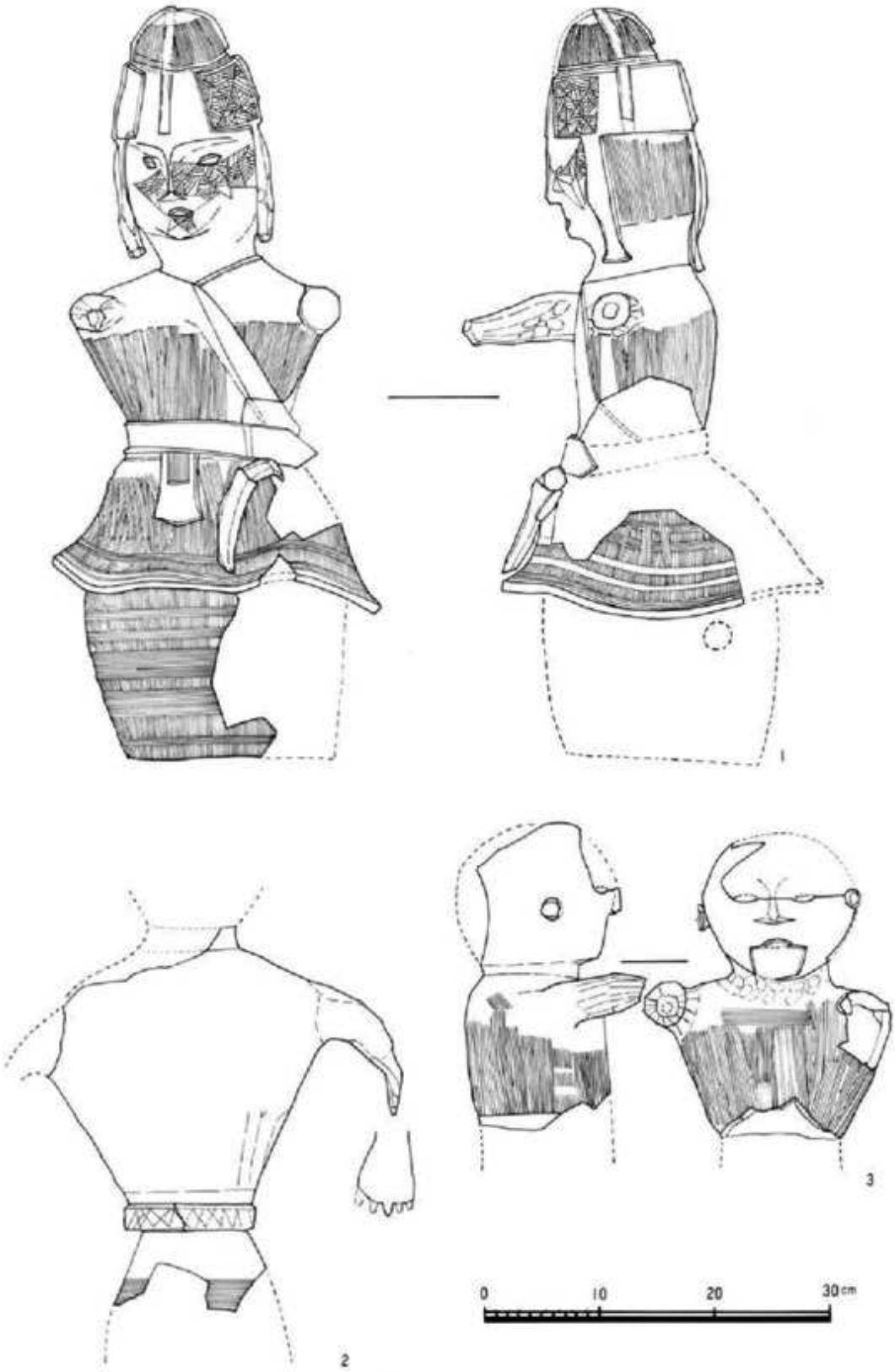


1 表土
2 黄褐色砂礫層

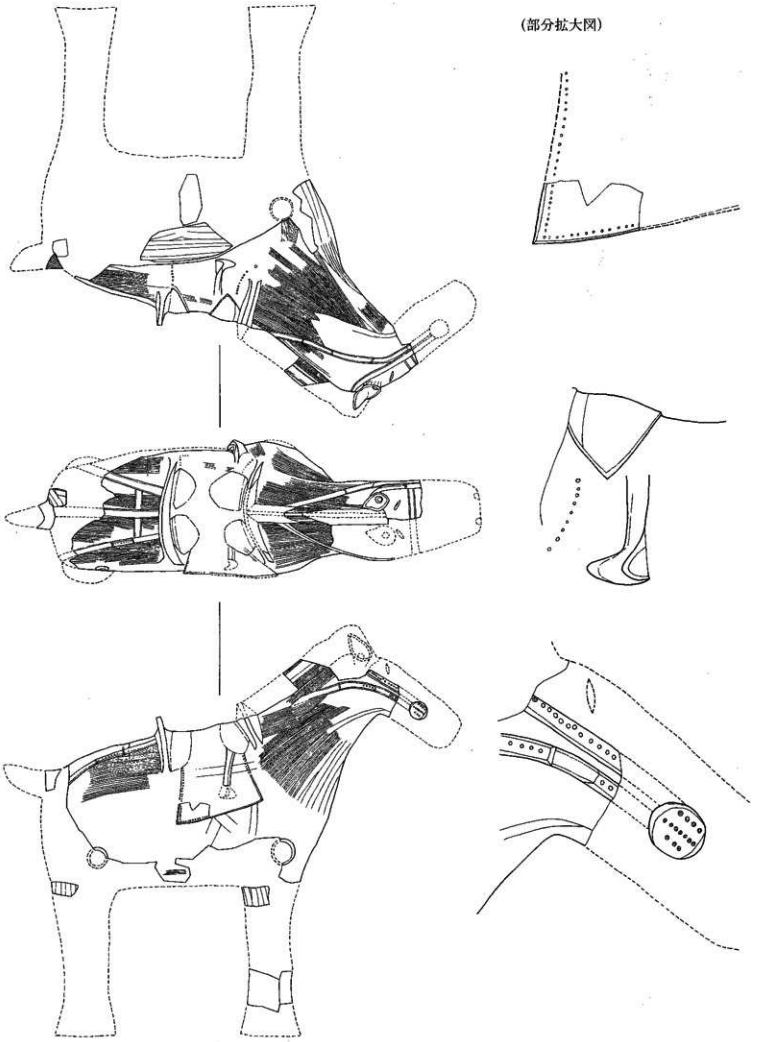
E20トレンチ東西断面図

図版 第8

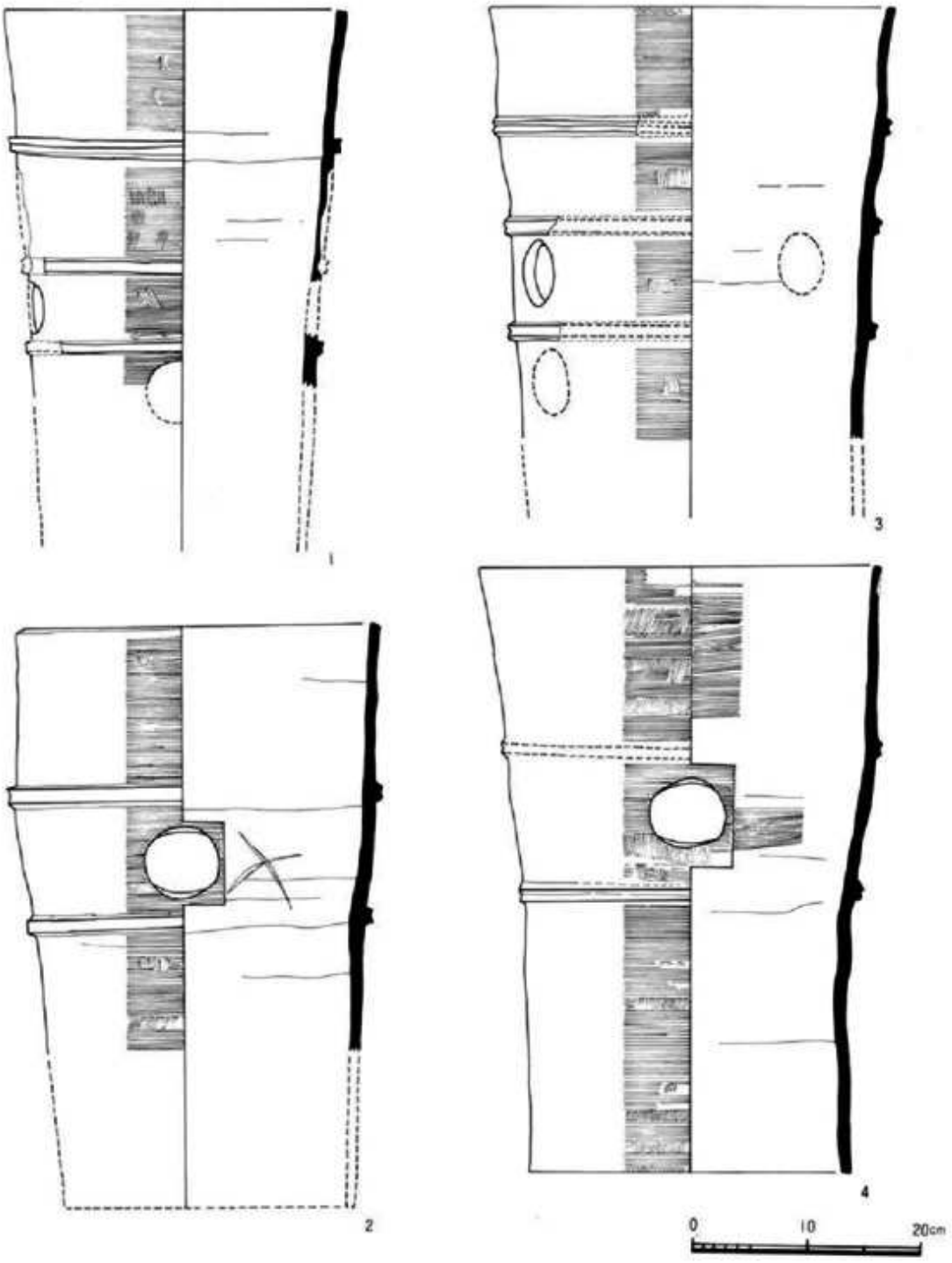

L＝70.0m
1 表土
2 礫層黄褐色砂礫
3 黄褐色礫層
4 黄色砂礫層
T２トレンチ南北断面図
L＝68.0m
1 表土
2 暗黄色砂層
3 黄色砂層
L＝64.0m
E14トレンチ東西断面図
L＝68.0m
L＝66.0m
L＝64.0m
L＝62.0m
1 表土
2 黄褐色砂礫層
0 1 2 3m
E７トレンチ東西断面図



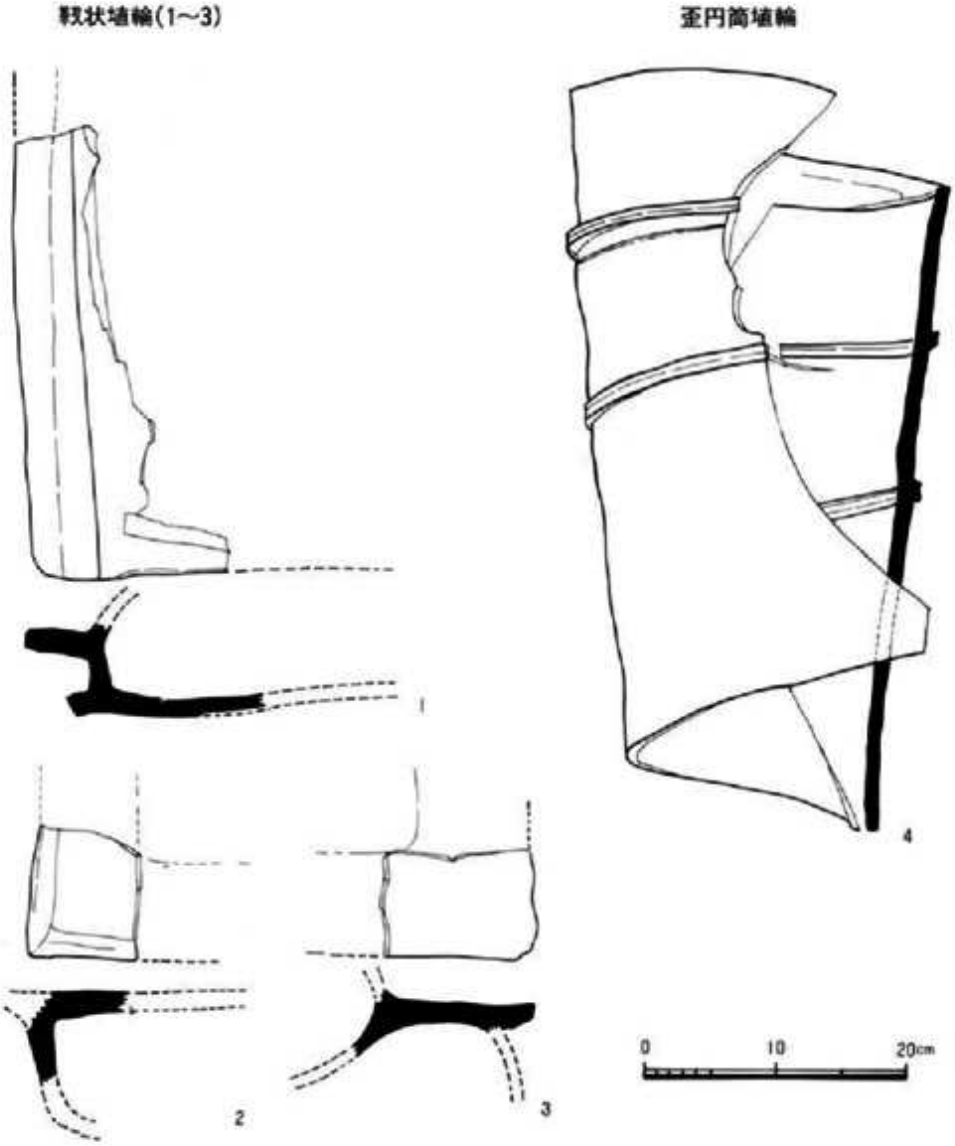
7号墳出土人物埴輪実測図



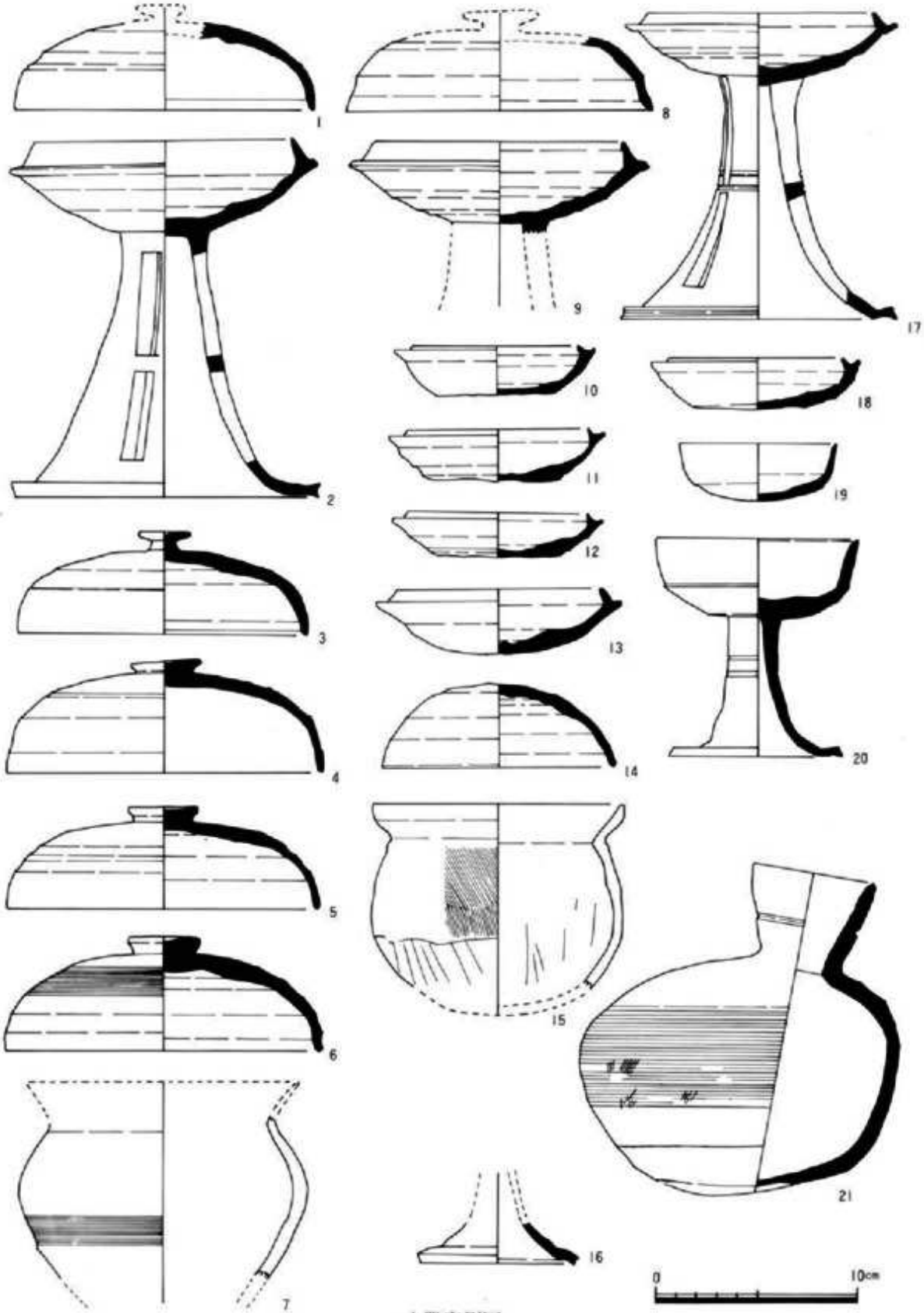
7号墳出土馬形埴輪実測図



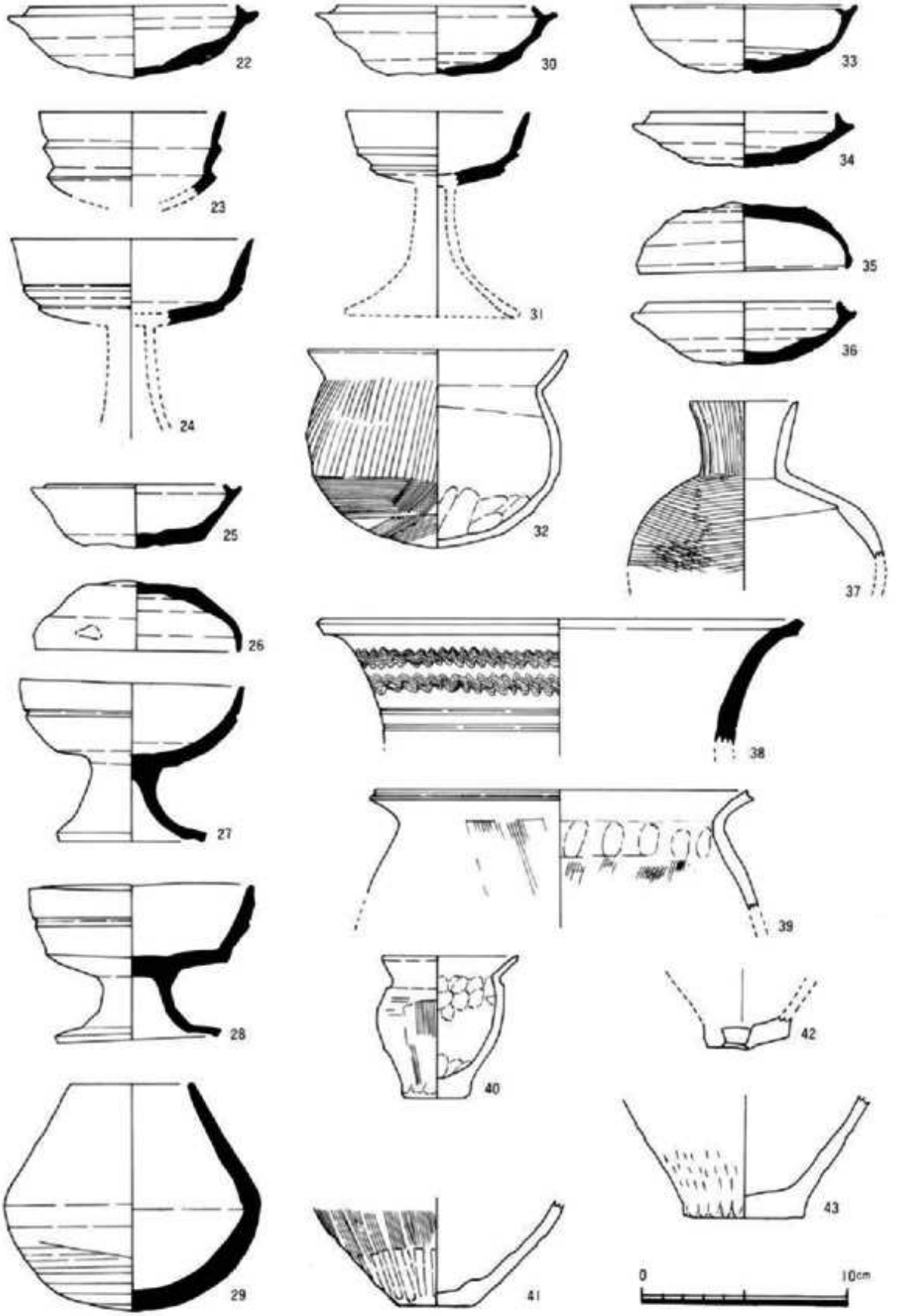
7号墳出土円筒埴輪実測図



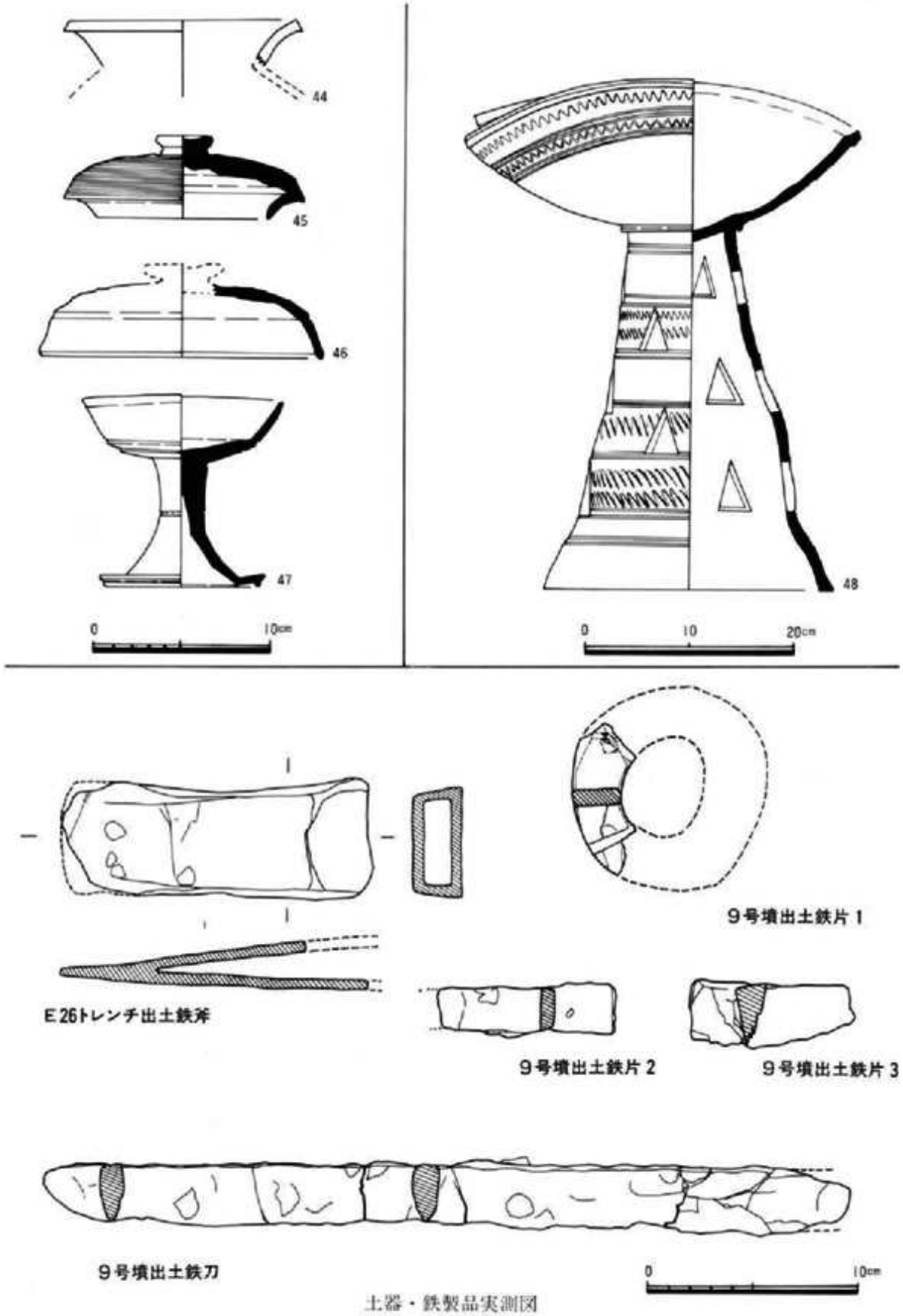
7号墳出土埴輪実測図



土器実測図



土器実測図


44
45
46
47
48
0
10cm
0
10
20cm
9号墳出土鉄片1
E26トレンチ出土鉄斧
9号墳出土鉄片2
9号墳出土鉄片3
9号墳出土鉄刀
0
10cm

土器・鉄製品実測図

写真図版

(1) 伐採前の丘陵（東から）

(2) 伐採後の丘陵（右端4号墳・東から）

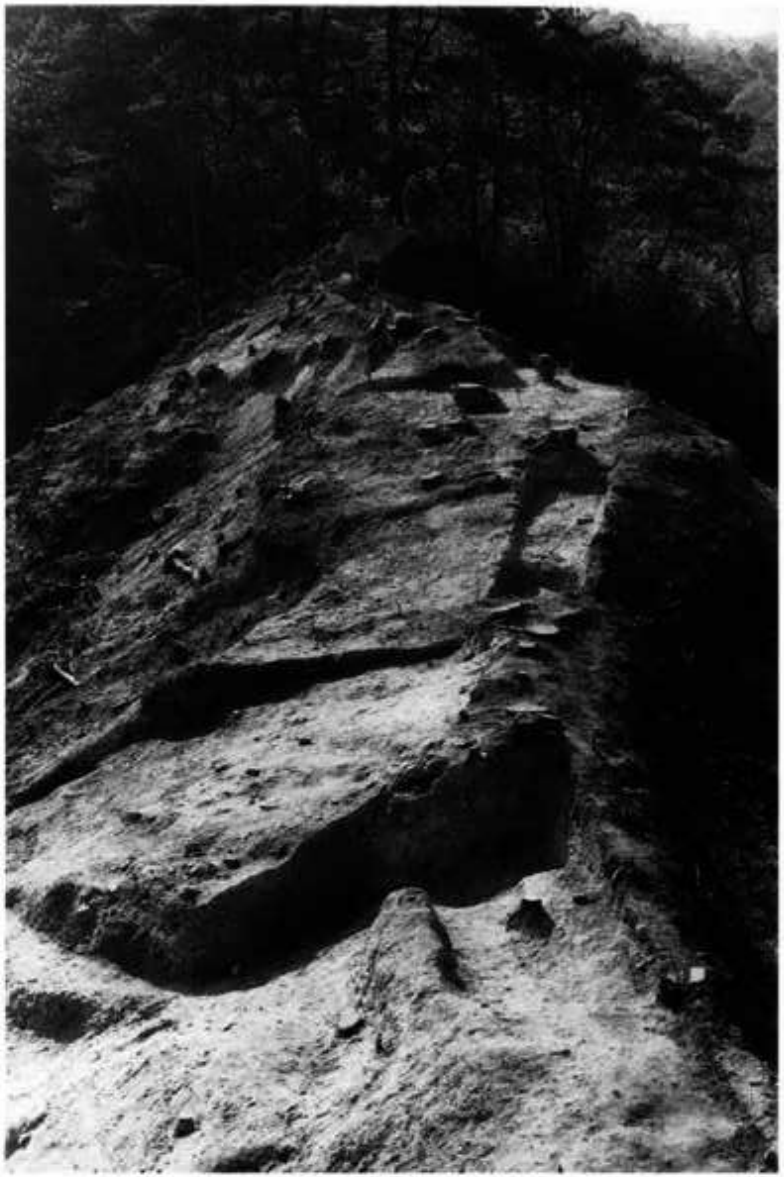
(1) 東斜面トレンチ（東から）

(2) 4号墳からみた丘陵端（南から）

(1) 4号墳からのトレンチ（南から）

(2) 丘陵端東斜面トレンチ（東から）

(2) 丘陵東斜面（北東から）



(1) 4号墳から丘陵南を望む（北から）

(1) 4号墳墳丘全景（東から）

(2) 4号墳玄室（南から）

(1) 4号墳前方部（南東から）

(2) 4号墳前方部（東から）

(1) 7号墳南西溝土層（東から）

(2) 7号墳埴輪出土状況（東から）

(1) 7号墳馬形埴輪出土状況

(2) 7号墳人物埴輪・円筒埴輪出土状況

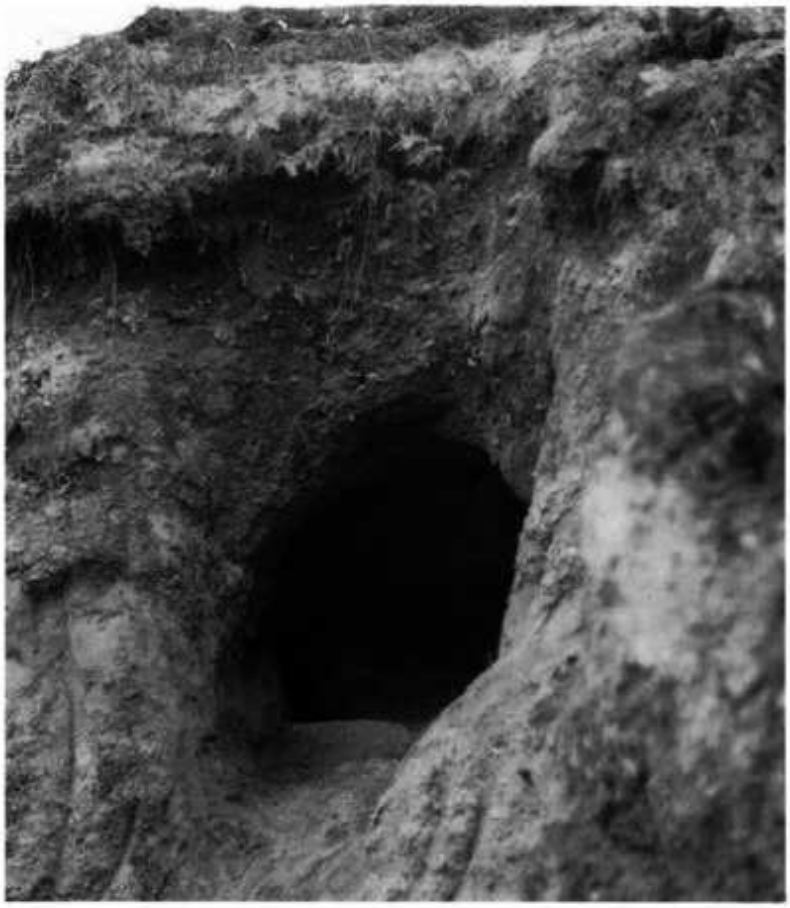
(1) 9号墳墳丘全景（東から）

(2) 9号墳高杯出土状況

(1) 9号墳全景

(2) 9号墳銅鏡出土状況

(1) 7・8・9・10号横穴墓(東から)



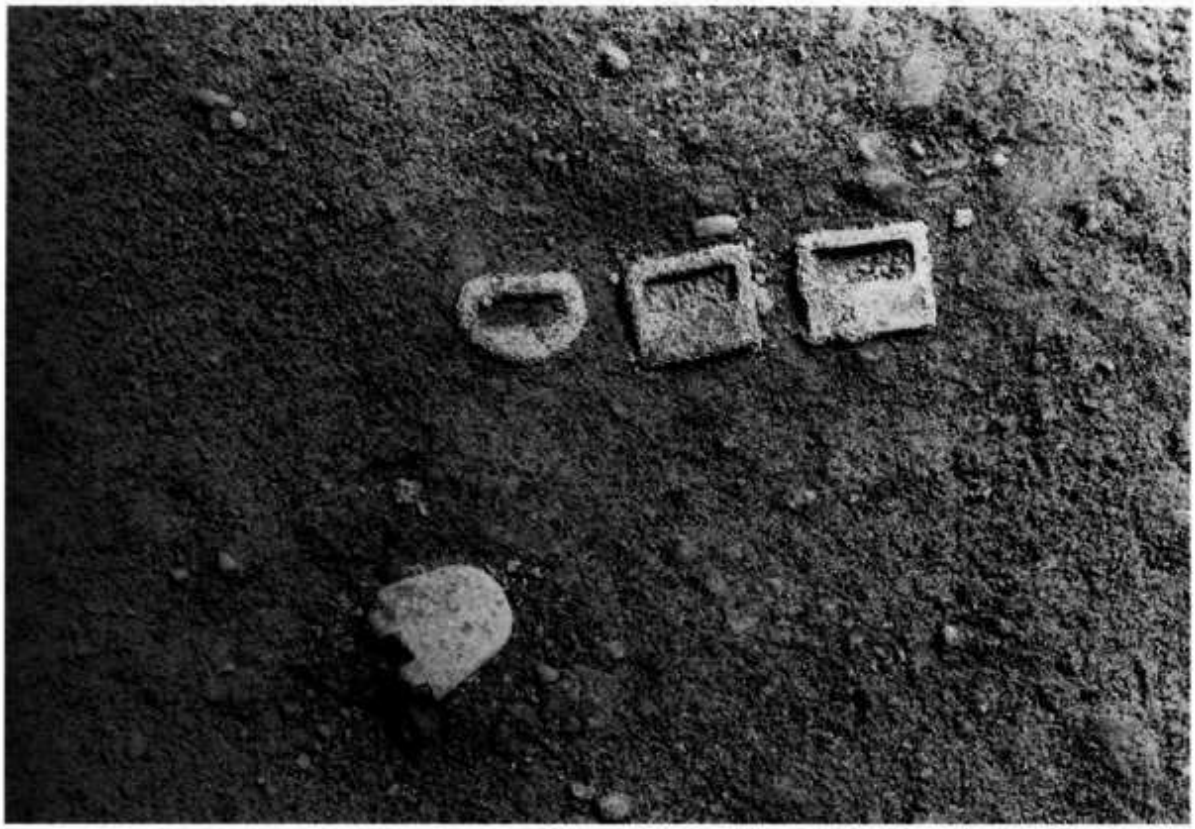
(2) 4号横穴墓
(東から)

(1) 7号横穴墓棺台

(2) 8号横穴墓遺物出土状況

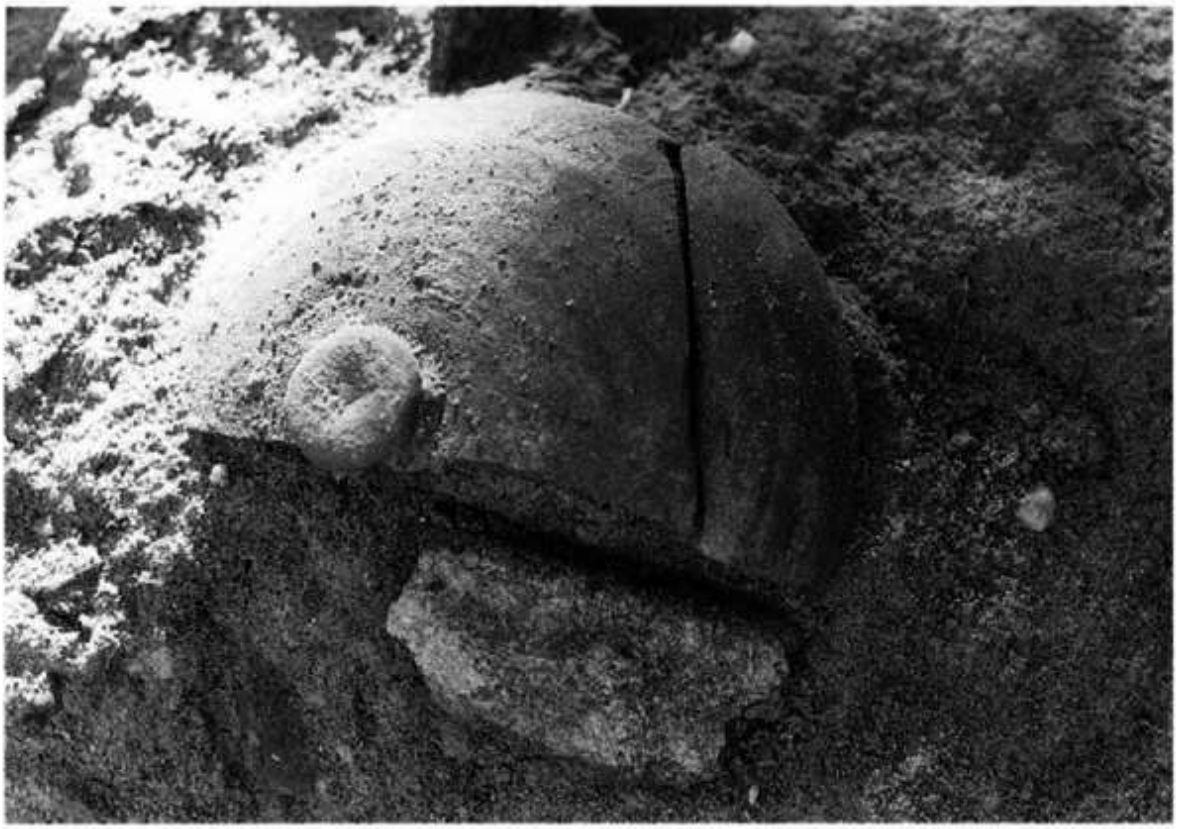
(1) 10号横穴墓人骨・遺物出土状況

(2) 10号横穴墓床面遺物出土状況

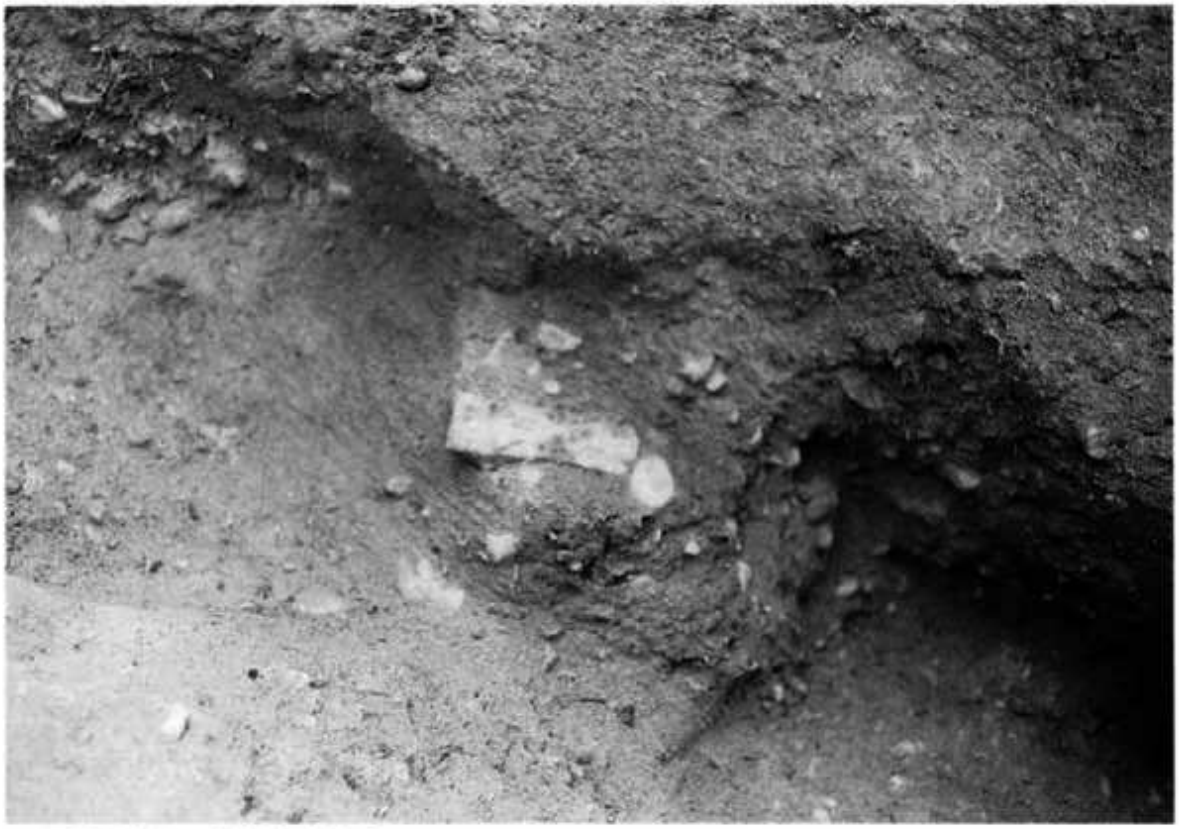


(1) 10号横穴墓銙帯金具出土状況

(2) 10号横穴墓人骨出土状況



(1) E18トレンチ高杯蓋出土状況



(2) E26トレンチ鉄斧出土状況

(1) 7 分銅出土人骨第1墳(正面)

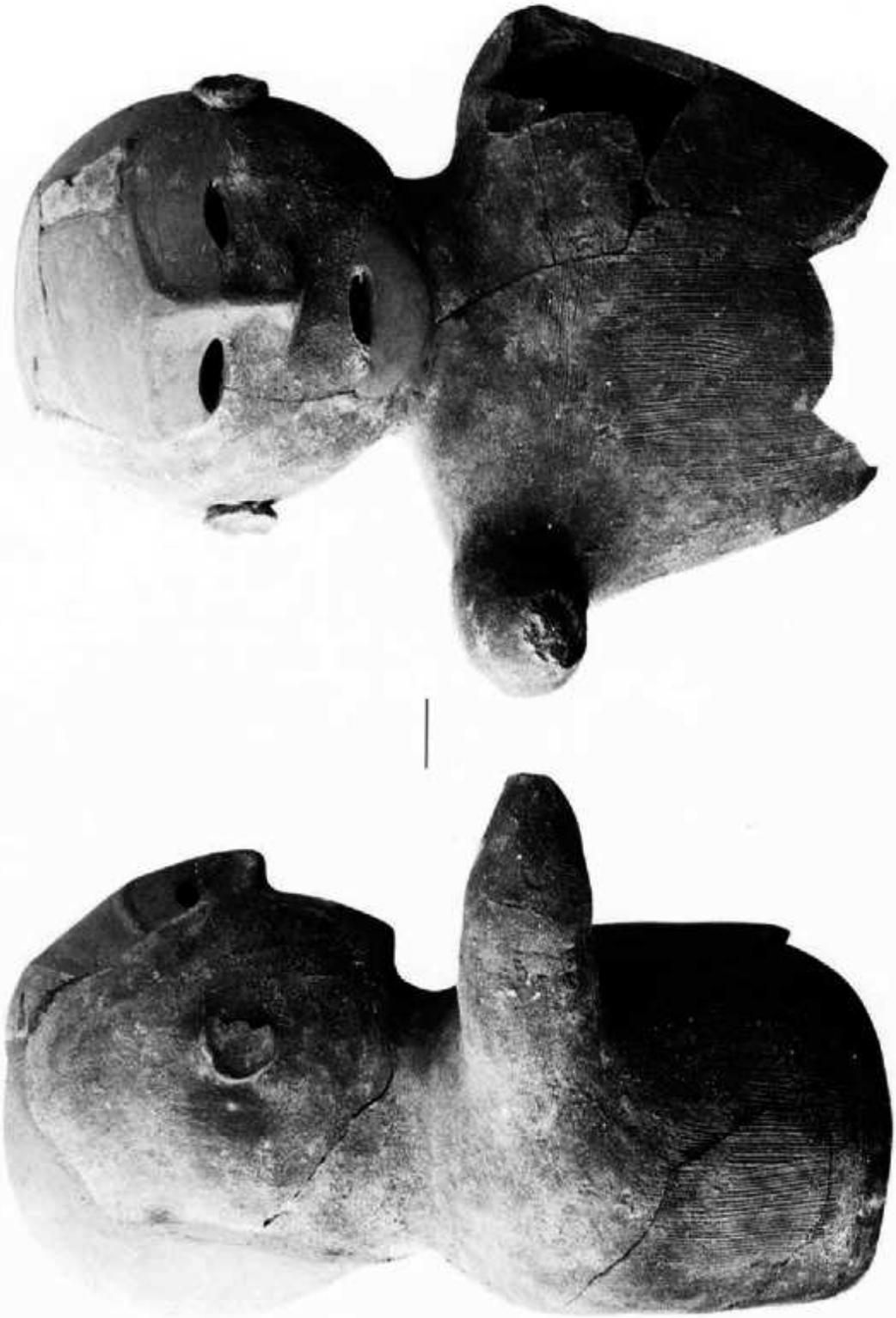
(2) 7 分銅出土人骨第1墳(側面(盾文部分))

(1) 7号墳出土人物埴輪1（右側面）

(2) 7号墳出土人物埴輪1（左側面上部）

(1) 7 ラ岩出土人物埴輪 1（背面）

(2) 7 ラ岩出土人物埴輪 1（部位不明）



7 谷塚出土人物埴輪 3

(1) 7号墳出土人物埴輪2(正面)

(2) 7号墳出土人物埴輪2(左側面)

7 号墳出土馬形埴輪

(1) 7号墳出土馬形埴輪左側頭首部

(2) 7号墳出土馬形埴輪鞍部

(1) 7号墳出土銅鐸文器蓋

(2) 7号墳出土銅鐸

3

5

45

2

21

29

17

土器 (1)

19

20

18

13

10

11

37

12

36

土器 (2)

14

26

35

33

30

28

47

27

土器 (3)

(1) 10号横穴墓出土跨帯金具

(2) 9号墳出土ガラス小玉

(3) 9号墳出土銀環

(4) 9号墳出土銀環

(5) 10号横穴墓出土鉄釘

弥生式土器

40

15

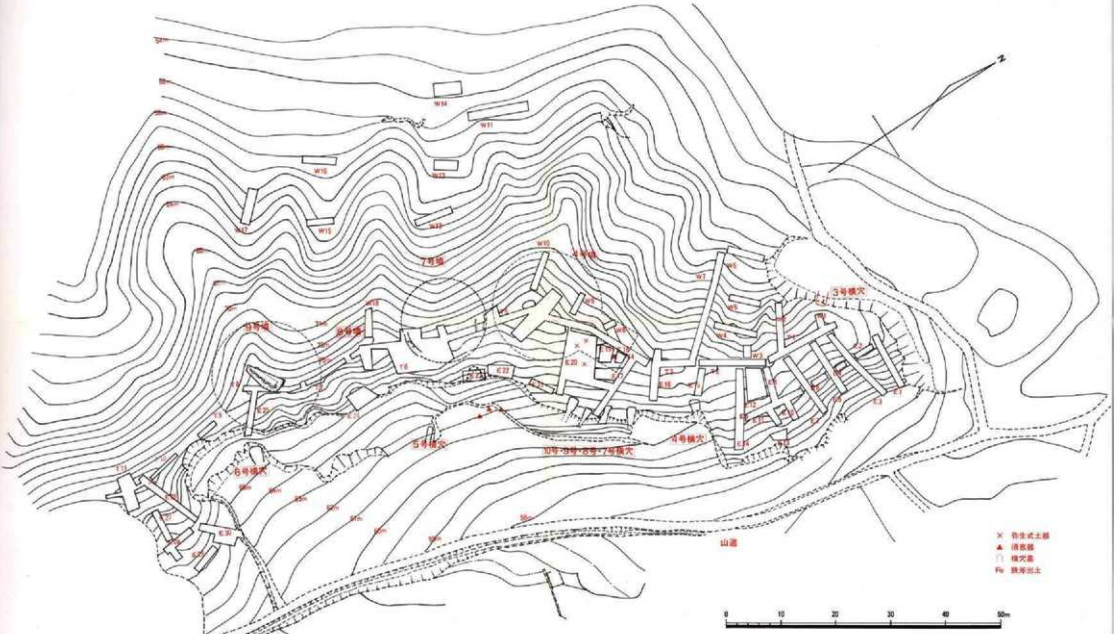
32

弥生式土器・土師器

1989年12月20日　印刷
1989年12月26日　発行

京都府田辺町
堀切古墳群調査報告書
（田辺町埋蔵文化財調査報告書　第11集）

編　集　堀切古墳群調査団
発　行　田辺町教育委員会
〒610－03
京都府綴喜郡田辺町大字田辺小字田辺80番地
電話 07746－2－9550
印　刷　㈲関西プロセス
〒615
京都市右京区山ノ内山ノ下町13番地
電話075・312－3161㈹　FAX075・312－9388


7号墳
4号墳
3号墳
2号墳
6号墳
5号墳
1号墳
3号横穴
4号横穴
5号横穴
6号横穴
10号・9号・8号・7号横穴
山道
× 弥生式土器
▲ 須恵器
⊓ 横穴墓
Fe 鉄滓出土
0
10
20
30
40
50m

福明古墳群調査全体図